

令和 6 年度文部科学省委託事業

教師の英語力・指導力向上のための 実践的オンライン研修

Online course for Teaching English (OTE)

第二次(最終)報告書

ブリティッシュ・カウンシル

令和 7 年(2025 年)3 月

Contents

1. 本研修のまとめ	3
2. 本研修のねらいと構成	6
研修の特徴	6
実施形態	7
スケジュール	7
構成	7
3. 成果	8
その 1: 受講者数及び修了者数、課題提出率	9
その 2: 満足度	10
その 3: 授業での活用	12
その 4: 研修受講前後の変容	16
4. 考察	24
5. 課題と今後	26
付属資料	27
1) 受講前の意識	28
2) 教員研修の課題の整理	44
3) 事前事後意識調査のデータ	46

■ブリティッシュ・カウンシルについて

ブリティッシュ・カウンシルは、文化交流と教育機会を促進する英国の公的な国際文化交流機関です。私たちは文化芸術、教育、英語を通じて、英国とその他の国の人々の間につながりをつくり、理解と信頼を育みながら、平和と繁栄を築くための支援を行っています。世界 200 以上の国や地域の人々と、また、100 以上の国において活動し、2022 年度は、6 億人がオンライン、放送、出版物を通して私たちが提供する情報にアクセスしました。

日本では 1953 年に活動を開始しました。英会話スクールや英国資格試験の運営、教育機関・企業向け英語研修、英国留学情報の提供、英語教員への研修、高等教育や文化芸術分野での国際交流支援などを行っています。2023 年、日本と英国のつながりを築く私たちの活動は 70 周年を迎えました。

ブリティッシュ・カウンシル公式ウェブサイト: www.britishcouncil.or.jp

1. 本研修のまとめ

本報告書は、令和6年度「教師の英語力・指導力向上のための実践的オンライン研修」(文部科学省委託事業)についての成果を記載しています。本事業は、「教師が学び続けられる機会の保障に向けて、オンライン研修を実施し、全国的な教師の英語力・指導力の向上を図る」ことを目的とし、英国の公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルが企画運営しました。

発信力の強化、特に「話すこと(やり取り)」の指導に焦点を当てた10時間のコースで、ライブで参加するワークショップ(同時双方向型)と、個人で取り組むセルフアクセス(eラーニング)双方の特徴を効果的に組み合わせました。

研修で学んだことを現場で実践し、成果につなげていくことは容易ではありません。ましてや教育現場では多岐に渡る要素が影響し合うため、教師の指導改善には様々な条件が必要となります。働き方改革が進む中、オンライン研修には多くの期待が寄せられますが、そのすべてに実効性が担保されているわけではありません。

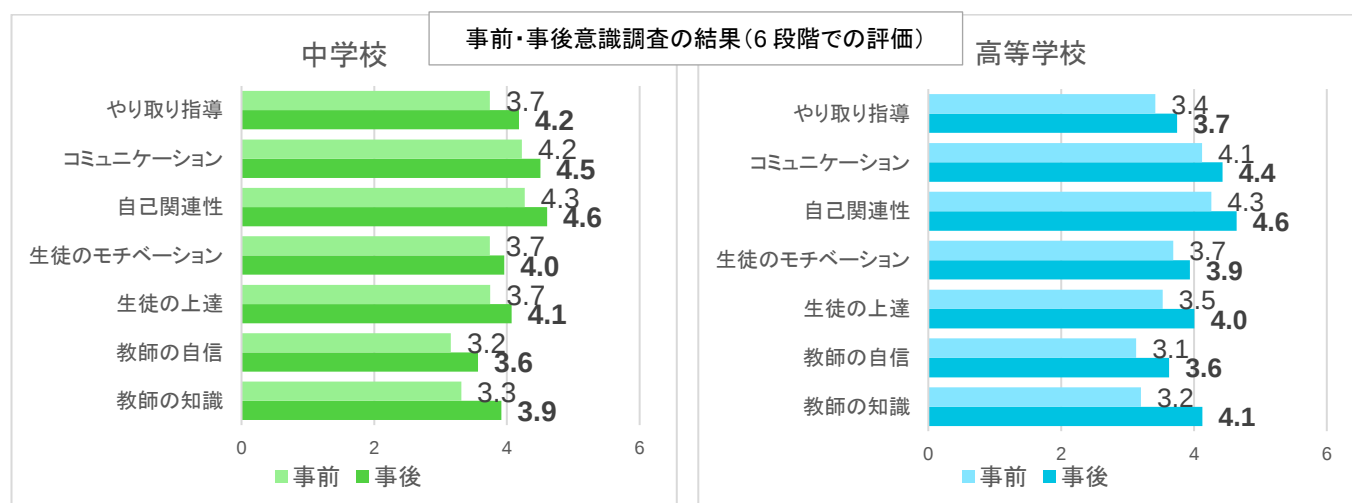
そういった様々な制約がある中、本事業においては非常に高い完了率の達成のみならず、研修後の指導力の向上を裏付ける様々な証左が得られました。受講教師は、「指導に自信がついた」「生徒が意欲的になった」「英語力が向上した」等々の感想を寄せています。

■オンライン研修を通しての、目覚ましい授業改善

約8か月にわたるオンライン研修の成果には、次のことがあげられます。

1. 中学校教員400名、高校教員400名の全受講者の内、全修了要件を満たした受講者は約9割で、その97%が「自分に役立つ研修だった」と回答しました。加えて、修了者のほぼ全員が研修内容を授業で実践し、その結果について非常に肯定的な感想を寄せました。

2. 研修前後に行った意識調査において、全項目において大きな改善が見られました。特に、「授業中における教師の英語による発話の割合が50%以上」という回答が、中学校で研修前55.8%から研修後68.8%(全国平均68.4%)、高校で39.5%から50.6%(同平均39.9%)となりました。また、実践内容や教師の指導における知識や自信に関する質問においても数値は上昇。「やり取り指導に必要な支援を提供する方法」について「理解がある」という回答が、中学校で事前40%が事後78%、高校は44%から77%と大きく向上しました。



3. 研修での学びを授業で実践した受講者の割合は 97%を超え、そのほとんどが授業改善を示唆するコメントを寄せています。中には生徒の意欲や英語力の向上を報告するものもありました。

- 全ての講義が実践的でその日のうちに実際に授業に活かすことができる内容だったため、非常に有意義なものでした。授業で活用して練習することで自分の力になっていたのを感じました。(中学校)
- 生徒の英語使用量はかなり伸びてきたと思います。実際の振り返りでもそのようにコメントを残す生徒が増えてきました。教師側の英語使用量を伸ばす取り組みも続けていきつつ、異なる言語を学び理解する楽しさを今後も教えていくことができたと思います。(高校)
- 日々の授業に学んだ内容を取り入れるだけで子どもたちの取り組みが変わったように感じます。特に、苦手と思いがちな生徒の取り組みが前向きになったように感じます。(中学校)
- 研修で知った活動を自分の授業時に実施し、生徒の反応が好転したのを見て、非常にうれしかった。(高校)

以上に加え、本研修の受講者の多くが、今後英語指導を行う上で非常に重要となる次の 2 点を実感できたとブリティッシュ・カウンシルは分析しています。

■スピーキングへの取り組みが他の技能向上に与える影響を体感

1 点目は、生徒の情意面や学力面の変容を通して、英語という言語を習得する過程や複雑さ、そして可能性についてより明確なイメージを持てたことです。例えば、スピーキングの力は、語彙やライティング、リーディング等と相互に深く関連しながら上達するもので、他の技能についても同様です。私たちは、実際に言語を使用する過程で、多くの複雑な思考や推測を瞬時に行なっています。言語を習得することは、実際に英語を使いながら、記憶から情報を取り出し、内容を組み立て、生徒間や教師とのインタラクションを重ね、相手からのフィードバックを受け取りながら、自分の知識やスキル再構成していく営みです。本研修の受講者は、文法やリーディング力だけが独立、先行するのではなく、スピーキング、リスニング、ライティング等が相互に影響を与えながら言語力が高まることを体感したことが、コメントからうかがえます。

- 書く活動は、独立して進めるのではなく、話す活動を通して行うことでより効果が増すことを実感した。いきなり文章を書かせるのではなく、スモールステップで行うことの重要性を理解した。(高校)
- 今回の学習を通してオーラル主体の授業を展開するようになって明らかに生徒が変わり始めました。パートナーとの対話を楽しみ、英語を話すことにかなり抵抗がなくなりました。教師の英語も理解できるようになってきたと喜んで報告する生徒が増えました。英語が好きになったという生徒も増えました。生徒たちは自分が想像した以上に会話を楽しみ、反応してくれるようになりました。わずか数か月でこれだけの変化が起こるとは思っていませんでした。今まで英語が苦手だった生徒が、英検 3 級に合格したと報告してくれた時は本当にうれしかったです。1 学期までは、県の学力調査で平均点が 40%程度だったのが 12 月には 60%まで向上しました。スピーキングを中心に授業をすることで、リスニングやリーディング、ライティングにおいてもこんなに英語力が向上するとは思っていませんでした。(中学校)

■生徒の意欲向上を導く、質の高い、根拠に基づいた指導技術

2 点目は、生徒の学習意欲を喚起するためには、本研修で紹介したような、根拠に基づいたスモールステップで進める指導が非常に有効であり、それを自分の指導で実現できたことです。すでに実証されている再現性が高い手法は、属人的ではないため、教師であれば誰でも習得可能です。それを実践することで、生徒の「できた!」という成功体験を導きます。それがたとえ小さくても、教師が質の良い指導を重ねることで、生徒の意欲は確実に向上する、そして学

力向上につながることを実感する機会となりました。全ての授業で実践することは難しくても、受講した教師は、そういった指導法がすでに存在することを理解できました。

- 誰でもできるスモールステップをたくさん準備する必要があります。「では書いて」と丸投げするのではなく、「これなら私でもできる」と思うような小さな成功体験をたくさん用意することが大切だと思いました。
- どの活動においても足場がけの重要性を感じた。自分自身の授業を見直してどのようにスモールステップを用意できるかを考えるようになった。
- 生徒が自信を持って発話できるような丁寧なプロセスを知ることができました。これまでの自分は英文の提示から生徒の発話までが少し強引だったように思います。
- 自分自身のできていないことや苦手なことを振り返ることができ、それらを改善するための有効な手立てを教えてもらった。何よりも、こちらが手立てを行えば生徒ができるようになるということを再認識できたことが一番の成果であり、授業に対して自分が前向きに取り組んでいる。

ブリティッシュ・カウンシルは、これまでに日本各地で多くの英語教員研修に関わってきましたが、いずれの教員研修でも受講者の授業改善を進めることを最重要目的としています。そして、本事業においても、その知見と経験を活用しました。

このような成果を導いた要因は、本研修には、教師が授業改善を進める上で必要な要素が多く含まれていたと、ブリティッシュ・カウンシルでは結論づけています。今回含まれていた要素は次の通りです。

■成果を導いた要因

- 1) 受講者の課題やニーズを基に組み立てる
- 2) 教室で使える指導技術を科学的根拠や定説となっている理論と共に示す
- 3) 指導のモデルを提示する（あるいは体験する）
- 4) 受講者の「学びやすさ」に適切に対応した学習教材と学習管理システムを活用する
- 5) 「事後タスク」を設定し、研修と授業が連動するための支援を提供する
- 6) 英語指導・研修運営の科学的根拠を取り入れるとともに、知見や経験の豊かな専門家が関わる

「質」の高いコースを企画・提供する上で必要なのは、指導に関する研修内容だけではありません。オンライン研修の特性等を踏まえた、研修構成・研修方法・研修教材・成果測定等各方面における配慮が必要になります。また、授業改善の成果の測定やオンライン研修という形態での行動変容には様々な難しさがあります。

教師の働き方改革と指導力向上の両立が求められる中、地理的・時間的・条件に左右されることなく広く教師に研修機会を担保する上で、確かな効果を導く方策が特定されたことには大きな意味があります。

個々の教師や学校の文脈や課題は異なります。そのため、全受講者の授業で今回の学びを適用するには更なる工夫が必要な場合もあります。また継続も容易ではありません。本研修においては、勤務中の研修時間の確保や、ICT環境の整備など課題も見られました。今後はそれらに対する対応を重ねることで、より一層の成果が期待されます。

2. 本研修のねらいと構成

本事業の目的は、生徒の「話すこと[やり取り][発表]」等の発信力を高める指導力の向上・充実を、オンライン研修で実施することです。特にやり取りの指導強化が求められる中、話すことの指導を中心に、ブリティッシュ・カウンシルの専門的な見地にに基づき、研修内容の構成を行いました。以下にその主旨をご説明します。

このコースでは、中高の英語教師のニーズ調査によって改善が必要であると特定された 3 つの領域に焦点を当てています。学習指導要領では、スピーキングにおいてやり取りの領域が導入されましたが、多くの教師は即興的なやり取りの指導に課題を感じています。また、指導時間の確保やフィードバックの与え方の点からもライティング指導に不安を訴える声もあります。

また、あまり表出しませんが、語彙指導についても取り上げる必要がありました。語彙は言語力の根幹ですが、「単語リストを暗記する単調なもの」ととらえたり、生徒任せになっていたりする現実もあります。本研修を通じて、語彙学習が言語活動のすべてに不可欠であることを教師が理解し、生徒が関心をもって効果的に学習できるような指導方法を紹介することを目指しました。

このコースの総時間は 10 時間ですが、このスピーキング・語彙・ライティングの 3 分野に焦点を当てることで英語の授業に大きな変化をもたらすことを目指しました。

子どもが言語を学習する過程においては、人が介する双方向の言語使用こそがすべての基盤であるとされています。また、外国語として英語を学ぶ環境において、授業中の教師と生徒のインタラクションがもたらす効果についても多くの報告があります。生徒の、自発的で双方向のやり取りのスピーキング力を向上させることは、リスニング、リーディング、さらにはライティング力にも良い影響を与える可能性が高いと考えられています。

本研修では、その様々な側面を受講者が実感し、生徒の授業への関心と満足度の向上を期待して設計しました。

研修の特徴

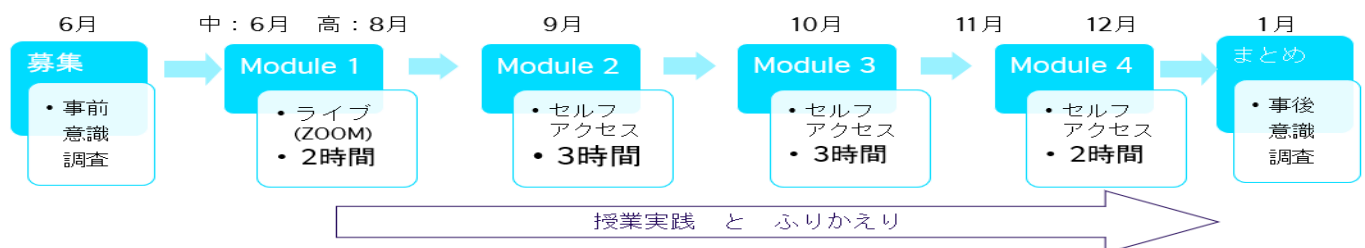
- ライブで実施するオンラインワークショップ 1 モジュール 2 時間と、セルフアクセス(e ラーニング)3 モジュール計 8 時間、合計 10 時間のコース。
- それぞれのモジュールで学習後、研修で学んだ具体的・実践的な指導技術を実際に行う「事後タスク」に取り組むことで、授業改善を進め、指導への自信を高める。
- まずライブ(同時双方向型)のワークショップで、英語指導の国際資格と日本での教員研修に経験豊かな講師によるデモ授業を体験。必要な指導上の配慮や支援の具体的・実践的な例を学ぶ。
- 続いて、セルフアクセス(e ラーニング)で、第二言語習得、動機付け、学習科学など、妥当性のある科学的根拠に基づいた効果的な指導法と、それを行うべき理由や効果の理解を深める。
- e ラーニングでは、ブリティッシュ・カウンシルが英語教員向け研修で初めて AI を採用。多様な教師や生徒を登場させ、実際にありそうな教室でのやり取り、解説に沿った指導場面のアバターや音声を作成し、参加者がより効果的に指導技術を学べるオンライン教材を開発。
- コース全体の企画運営には、実践的な英語指導の国際資格と日本での豊富な教員研修経験を持つ講師と専門チームが担当。

実施形態

- ライブ(リアルタイム): 同時双方向で行う、デモンストレーションを含むワークショップ(ZOOM 活用)
- セルフアクセス(オンデマンド): 学習管理システムを使った e ラーニング

スケジュール

中学校は 6 月、高校は 8 月にライブの研修を実施し、中高とも 9 月末からセルフアクセスでの受講を開始しました。各自が自分のペースで学習に取り組み、事後タスクを授業で実践、オンラインで報告を行いました。



構成

本事業の構成は次の通りです。「10 時間」という要件の中で、日本の中学校・高等学校の英語教師の課題に対処でき、「授業が変わる」という目的を達成するための構成です。

中高いずれも、モジュール 1 はライブで行うワークショップ、モジュール 2-4 はセルフアクセス(e ラーニング) で実施しました。

中学校

- モジュール 1 スモールトーク: デモ授業と分析
- モジュール 2 スピーキング指導
- モジュール 3 新出語彙や表現の指導と練習
- モジュール 4 書くことの指導

高等学校

- モジュール 1 技能統合型の指導: デモ授業と分析
- モジュール 2 スピーキング指導
- モジュール 3 新出語彙や表現の指導と練習
- モジュール 4 書くことの指導

高校のモジュール 1 については、受講者の興味関心に基づき、次のいずれかを選択。

A コース: 生徒の英語力を伸ばすこと(イメージ: CEFR A1 や、A2 の生徒の力を伸ばす)

B コース: 特にグローバルに活躍することが期待される層の英語力を伸ばすこと(イメージ: CEFR B1 以上を目指す生徒の力を伸ばす)

3. 成果

ここでは、本研修の結果(アウトプット)と成果(アウトカム)を4つの観点からご報告します。

その1 受講者数、修了者数、課題提出率等。

その2 満足度

研修修了者の研修全体に対する満足度と受講者の感想。

感想は、研修内容や生徒の変化、受講方法(オンライン)、受講者の意欲の観点で分類。

その3 授業での活用

研修での学びを、「事後タスク」として授業実践した内容。

スピーキング指導2回、語彙指導1回、ライティング指導1回の合計4回行った。

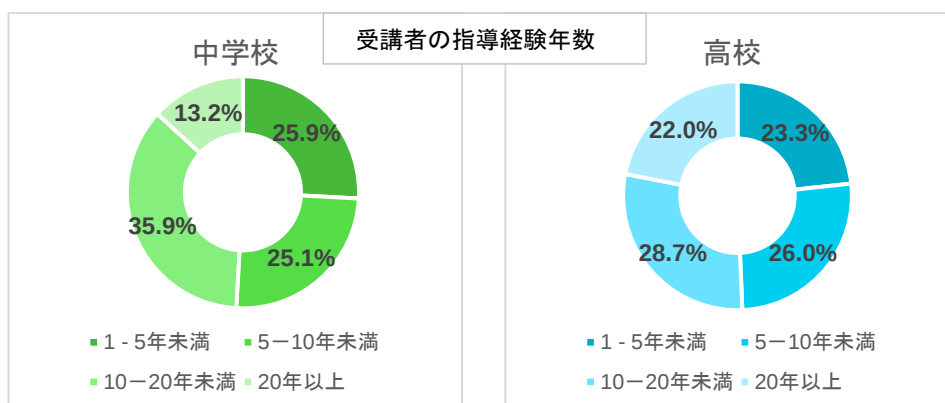
その4 研修受講前後の変容

研修受講前と受講後に、次の8分野において受講者に意識調査を行った。

A. 授業中の生徒や教師の英語使用割合	2問
B. やり取り指導	2問
C. コミュニケーション	3問
D. 自己関連性	2問
E. 生徒のモチベーション*	4問
F. 生徒の上達*	4問
G. 教師の指導に対する知識	5問
H. 教師の指導に対する自信	3問

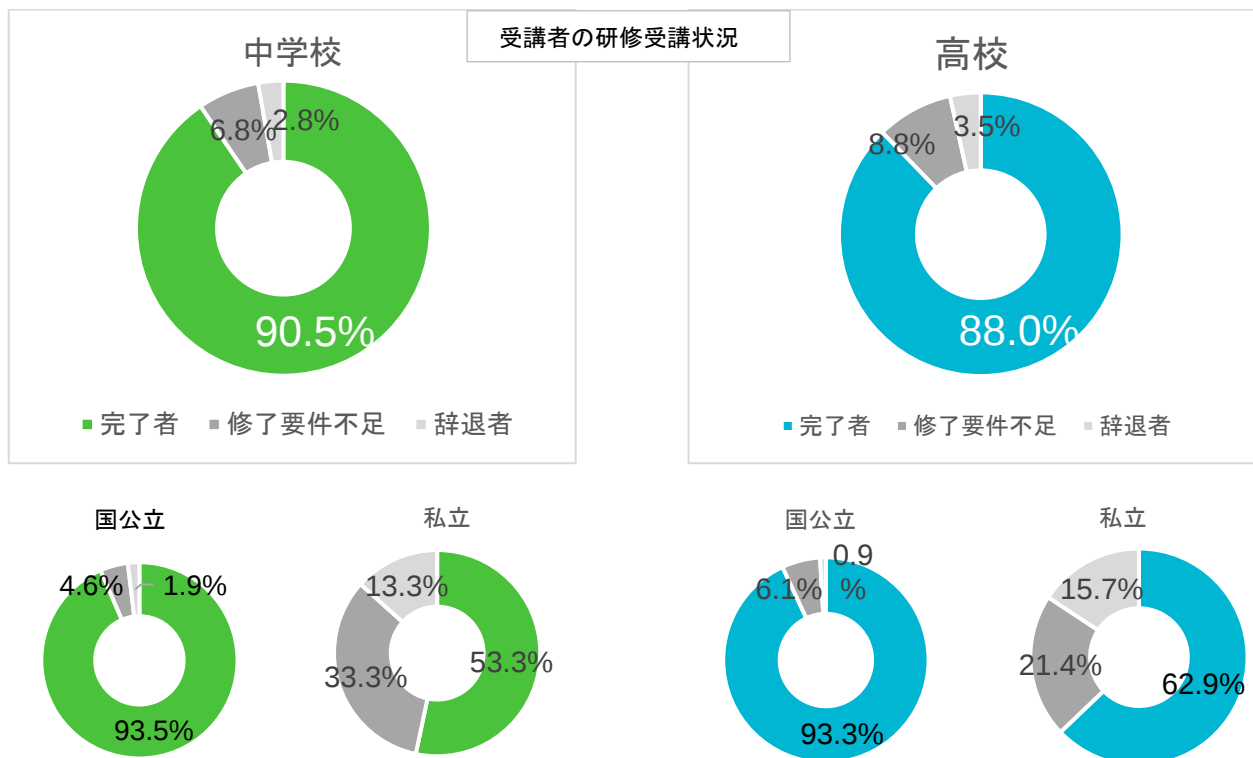
*の項目は教師の見取りによる把握

受講者の教員経験年数は以下の通り。教員経験が「5年未満」および「5-10年未満」が中高それぞれ25%程度、「10-20年未満」が中学校36%、高校29%を占め、「20年以上」は中学校13%、高校22%と受講者の経験は多様でした。

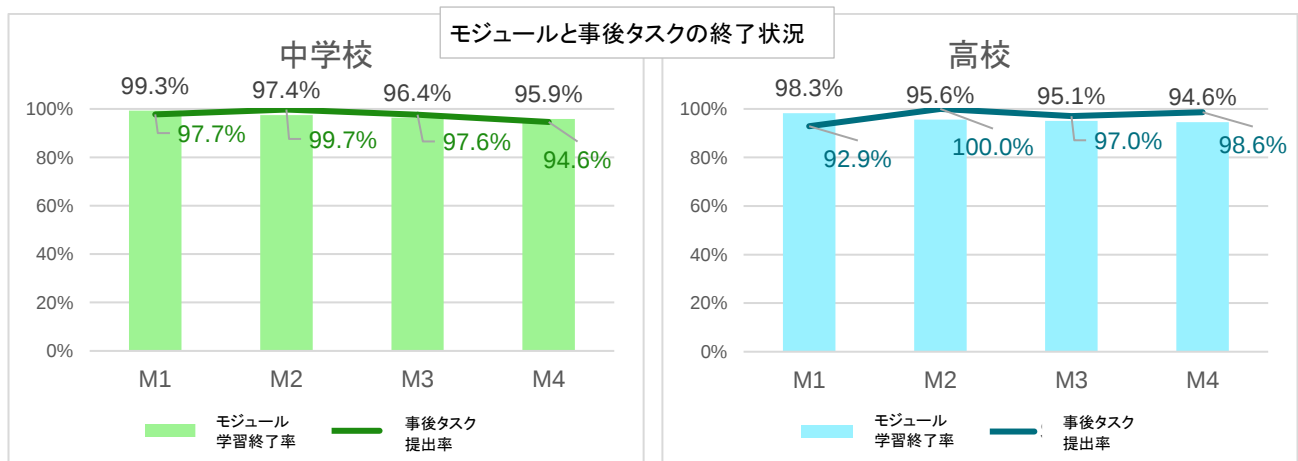


その 1: 受講者数及び修了者数、課題提出率

- 本研修は中学校 400 名、高等学校 400 名、合計 800 名が受講した。(受講希望者は定員を大きく上回り中学校 766 名、高等学校 706 名が応募した)
- 本研修の修了要件である、モジュール 1-4 及び事後タスク 1-4 を修了した者は、中学校 362 名で全体の 90.5%、高校は 352 名、88.0%であった。私立学校の修了率は 5~6 割程度となった。
- 途中で辞退を申し出た者の理由は、休職や校務で多忙等であった。



- 各モジュールにおける受講者数(途中辞退した者を除く)および事後タスク提出数は以下の通りである。
- 各モジュールにおいて 96%以上(中高)が終了し、事後タスクにおいてはモジュール終了者の内 97%が提出した。モジュールの学習を終了しても、事後タスクを提出していない者がいた。



なお、一般的な e ラーニングの完了率が 10%程度とされる中で、上記割合は非常に高い数値である。

その2: 満足度

今回の研修修了者に「本研修の有用度」を尋ねたところ、「役立った」という回答は中高共に約97%という非常に高い結果となりました。

「この研修は自分にとって役立った」(6段階で4-6を回答した割合)

中学校

97.2%

高校

96.9%

研修後の感想では、満足度の高い意見がほとんどであった。特に、『実践しやすい内容だった』という意見と、『良い振り返りの機会になり、意欲が上がった』という意見が多くみられた。

実践しやすい内容だった

中学校	高等学校
- 全ての講義が実践的で、その日のうちに実際に授業に活かすことができる内容だったため、非常に有意義なものでした。授業で活用して練習することで自分の力になっていったのを感じました。 - 初めて学ぶこともあり、勉強になった。学んだことを実践していくことで、自分の授業や指導にどのように取り入れていくか考えるきっかけになった。 - 実践を含めながらの課題があり、役に立った。実践が求められることで、緊張感をもって研修することができた。	- 今まで受けてきた研修の中でも、わかりやすく、真似して実践しやすかった。やっていることだけを模倣するのではなく、理論に従って実践することで、手応えを感じることもあった。 - 大変勉強になりました。すでに授業中の指導に数多く取り入れさせてもらい、指導力の向上を実感しています。 - とても勉強になりました！！わかりやすく実践しやすいものばかりで、すぐに授業に取り入れられる tips をたくさん学ぶことができてよかったです。

振り返りになり、今後の意欲向上につながった

中学校	高等学校
- 今まで自分のキャリアの中でやってきてよかったんだと答え合わせができた機会でもありました。また自分が生徒役として授業を受けているようで、多くのことをそのまま授業に生かすこともできました。 - 新しい指導方法を知るとともに、自分の指導をふりかえって改善するいい機会になりました。これが終わりではなく、これからも生徒と一緒に学び続けたいという思いでいます。	- 自身の指導を振り返り、その不足を感じるとともに、知見を広げることができました。今後も研鑽を続けたいと思います。 - この研修を通して、自分がこれまで行ってきた指導が正しかったことが確認できたり、自分の指導に足りないところを認識することができた。

満足度の高い意見の中には、受講した内容を実践したところ、生徒に良い反応があったという意見があった（英語力が上がった、前向きに取り組むようになった、など）。以下はその一例である。

受講内容を実践した結果、生徒に良い変化が見られた	
中学校	高等学校
- 自分の中でこうしたいというものができ、毎回ねらいが変わっていた過去に比べると、確実に生徒たちに力がついていると感じています。 - 日々の授業に学んだ内容を取り入れるだけで子どもたちの取り組みが変わったように感じます。特に、苦手と思いがちな生徒の取り組みが前向きになったように感じます。 - スモールトークを継続して行っており、徐々に相槌や会話内容の質が上がってきた。 - 今回の研修を実際の授業に活用し、生徒の成長だけでなく、自身の授業力の向上も実感することができた。 - 生徒の英語使用量がかなり伸びてきたと思います。実際の振り返りでもそのようにコメントを残す生徒が増えてきました。	- まずは日本語で意見を出し合う、想定される英語表現を覚えさせるなど、段階的な活動を経ることにより、生徒の学習活動がこれまで以上に活性化しました。 - 研修で知った活動を自分の授業時に実施し、生徒の反応が好転したのを見て、非常にうれしかった。 - この研修を通じて自分に足りないものに気付かされ、学んだことを実践することで少しずつ生徒の英語を学ぶ意欲が高まっているのを実感しています。 - 研修で学んだことを実践すると、生徒の反応に良い変化がありました。英語が苦手な生徒も英語を話すことは好きなので、意欲的に取り組む姿勢が見られた。

オンラインという受講形式に関しては、概ね好意的なコメントが寄せられている。

自分のペースで受講できて良かった	
中学校	高等学校
- 自分のペースで進めることができ、とてもありがたかったです。 - オンラインで受講できるので、自分のタイミングで学習できとても役立った。できればこのような研修を毎年受け、自分のレベルアップにつなげたい。	- 自分のペースで学習でき、とてもやりやすかった。 - オンライン学習でペースを自分で決めながら学習し、授業実践に取り入れる形は実際に働きながら取り組みやすかった。

オンラインでの学びは「孤独」になりがちであるが、初回に実施したワークショップで他の受講者と交流を持てたことがモチベーションに繋がっている。

参加者同士の交流ができて良かった	
中学校	高等学校
- 同じ目標をもった先生方と研修できたことがよかったです。 - 他校の先生とオンラインで実践を踏まえた情報交換等をし、いろいろな実態や実践を知ることができて良かった。その後の研修は自分で時間を見つけて、自分のペースで進めることができたので良かった。	この研修を通して、「その発想はなかった！」「もっと受講したい！」と思うことばかりでした。特に、zoomで他校の先生方と顔を合わせたときは、一緒に日本の高校生の英語教育を考えるという責任感と使命感を実感でき、とても嬉しかったです。ぜひまた参加させていただきたいです。

その 3: 授業での活用

各モジュールでの学習後、受講者は「事後タスク」に沿って授業実践を行い、その後振り返りを行った内容をオンラインフォームで報告しました。中高とも、スピーキング指導が 2 種、語彙指導が 1 種、ライティング指導が 1 種の合計 4 種の事後タスクが設定されました。

各報告では、授業実践の具体的な様子が記述されており、受講者が研修で学んだ指導テクニックやアプローチを活用した取り組みがよく伝わってきました。また、どのタスクにおいても、研修で紹介された内容の有効性に言及し、教師が手ごたえを感じた報告が非常に多くありました。中には、「うまくいかなかった」という報告も少数ありましたが、それは確かに研修内容を試し、その経験を今後の改善につなげようとする姿勢が伺えます。「やっていない」という報告はほとんどありませんでした。

中学校

1. スモールトークの指導

- これまでは会話の途中で黒板やモニターを見てただ読んでいたものが、自分の言葉で伝える場面が多く見られました。
- Finger Drills は生徒が今まで以上に集中して音を聴き取り、リピートしようと意欲的に取り組む姿勢が見られました。
- フィードバックを取り入れました。初めてやったのにも関わらず、よいリアクションがあり、新出文法を使った質問をする生徒がいて、フィードバックをする甲斐がありました。
- 会話の見本、考える時間の設定、質問の反復練習の仕方がいつもよりうまく進んだ。ただ会話をさせるだけでなく、生徒にも考える時間を十分に与え、反復練習をしっかりと行うことの大切さに気づいた。
- デモンストレーションや練習を経てからスモールトークに取り組むことで、自信を持って会話に取り組んでいる生徒が多く見られた。
- 上位層にはもちろん、英語が苦手な生徒にとっても意欲的に活動できるものだった。

2. スピーキング指導のフィードバックあるいはパフォーマンス評価

- 特定のペアをいくつか観察し、全体の学びにつながる英語表現をピックアップし、全体に還元した後にペアを変えて同じ話題で話させる、ということを行った。可能な限り汎用性の高い表現についてフィードバックを行うように心がけたので、2 回目の練習の際に似た表現を使おうとする生徒が増えたように感じた。
- 1 回目の後のフィードバックで、2 回目のときに To 不定詞と ing を混同することなく、間違えずに使えた生徒がほとんどになった。
- 学習したトピックをパフォーマンステストでランダムに出題した。採点方法はスモールトークのチェックリストを使用し、生徒にも事前に採点基準を説明した。終わった時に、「よっしゃー！できた」という声が聞こえてきた。スモールトークを継続した成果が生徒の実感となり、私自身の指導のフィードバックにもなった。
- ALT との授業の際に、別室で ALT と一対一でスモールトークのテストを行った。事前に評価内容を提示してから、練習をさせ、テストを行った。事前に評価の内容が提示されているので、生徒達は「どこを頑張ればよいのか」がわかり(振り返りシートより)、比較的好評であった。
- 生徒と一対一のスピーキングテストを行った。これまではスピーキングテストにおいて、文法を大切にしていたが、今回は反応や文になっていない単語での質問、表情や発話など、それぞれの生徒の長所を最後に伝えた。生徒は少しずつ発話が増えた。英語への苦手意識が改善されつつある。

3. 語彙指導

- 1 度に教える語彙の数を減らしたことで、生徒の作動記憶への負担が減り、キーワードを記憶したままで読解を進めることができました。これまではリストにあるすべてを読む前に確認していましたが、数を限定することの大切さを実感しました。
- 授業アンケートを取り、回答を見ていると「学校で単語を覚えることで、家での学習がよりわかりやすくなった」というコメントがあり、英語学習に対するモチベーション向上につながっていると実感しました。
- 一度に学ぶ単語の量を厳選することによって、低学力の生徒も覚えてみようというモチベーションにもつながっていたと感じる。また、単語の習得をこれまで生徒の自宅学習に頼っていたため、やらない生徒にとってはわからない単語が單元ごとに増えていってしまっていた。しかし、単語習得の活動を授業でより重要視することで、授業の中でも語彙数を増やせることが分かった。
- 発音→書いて覚える→ボキャブラリーテストという流れを、書くことができる・定着させるという意味があると思い続けていましたが、生徒にとってノルマのように感じている感じがしていました。いかに負担を減らし、いかに定着させるかの効果が見え始めるきっかけになりました。
- 【新出語彙】の練習と【想起練習】を並行して行っていたが、想起練習で特に効果が見られた。また、分散して練習を行ったことで、定着率が上昇し、単語テストのスコアが伸びた。
- 何度も繰り返し取り組むことが大切だとわかっているが、実際どのように取り組めばよいかわかっていなかった生徒が多かったと思います。実際自分自身も同じ形でしか指導できてませんでした。生徒は回を重ねるごとに覚えていることを実感し、自分が楽しく英単語を覚えられることに喜びを感じていたと思います。

4. 書くことの指導

- モデルの文章を参考にしながら、スモールステップで全体でタイミングを揃えながら書く活動を進めたことで、生徒間の進度の差が少なくなりました。確実に指導したい部分を逃さずに指導できたことで、生徒たちの書く活動に対する意欲が向上しました。
- ライティングは授業で一通り書き終えたものを、教師が点検して朱書きして返却する、というイメージが強かったですが、そのフィードバックではあまり効果がないと分かりました。学習者目線では、確かに、書いてすぐや書いている途中でアドバイスが欲しいし、いつまでも教師任せでは、自律した学習者にはならないと思いました。
- 私自身もこれまでライティング指導は「かなり時間を要し大変なもの」として捉えており、学期に数回しか実施しないことが多くありましたが、このような方法を知り、感動とともにこれまでのモヤモヤが晴れた気持ちになりました。
- まず生徒がオリジナルの意見を持つことが大切だということがわかった。そのために、生徒が意見を持ちやすくなるように、モデルキーセンテンスを魅力的なものにしなければならないとわかった。そうすれば、生徒が自然と書くようになると考える。
- アンケートでも「書く活動が好き」と答える生徒が増えました。話すよりも時間をかけて行える活動であること、また、自分の思いや考えを丁寧に伝えることができるのがライティング活動だと思います。

高校

1. ディスカッションの指導

- 質問の仕方や答える内容の例を丁寧に確認することによって、生徒が何から始めればよいかわからないということがなかった。
- 丁寧に足場をかけると、普段英語に苦手意識を感じている生徒でも話すことができる。
- 「わかりやすいモデル」に沿って応答ができたペアが、以前の活動時よりも増加したと思う。提示した「わかりやすいモデル」の応答に加えて、自主的に追い質問を行ったペアがあった。
- ディスカッション活動に限らず、指導の順番が重要であると学んだ。
- 足場かけの重要性を痛感しました。モデルを示した上で、「やり取り」を継続するための様々な表現を練習することで自信が持て、「もっと話したい！」という活気が溢れていたのも、生徒たちの「やり取り」を想定した入念な準備を行い、実践していきたいです。
- 質問文、応答、中学ですでに習っているようなフレーズでも十分に練習してからでないと実際の会話の中ではすぐに使えない。だから、練習が必要なんだと改めて理解しました。
- 生徒の意見を共有するための手立てとその準備が重要だということ。出てきた意見を臨機応変にRecastしたり、Paraphraseしたりして生徒に気づきを与えること。
- ディスカッションに必要となる表現を練習することで、生徒は自信を持って表現を使っていた。短時間でも、数回の練習でも、事前に練習することは効果的だった。回数を重ねると、他にも生徒が使いたいが、上手く言えない表現が出てくると思うので、それを加えていきたい。

2. スピーキング指導のフィードバック

- ディスカッションを続けるコツとして、相手の発言にリアクションすること、聞き取れなかったときは迷わず聞き返すことと、表現が難しい時は簡単にシンプルな表現に言い換えることを繰り返し伝えました。単語での発話になってしまったとしても、なるべくシンプルな語彙で話すことを心がける姿勢がありました。また、相手がより話しやすい雰囲気作りを生徒たちからするようになりました。
- ペアワークなどを机間巡視し、やりとりを確認し、コモンエラーや良い意見を全体にシェアした。全体的に間違いやすいところはどこなのか、どのような意見が良い意見となりうるのかを全体で確認することによって、スローラーナーにとっては、今後の指針につながり、その他の生徒にとっても深い思考につながるものとなった。
- プレゼンテーションとスピーチテストを実施し、原稿の添削などはもちろん、聞く側の態度・ポイントについても細かく指導を行った。1年生はプレゼンテーションとスピーチの違いを明確に区別できておらず、自身が学習したことをもとに、生徒にもそれぞれの効果と活動時のポイントの違いを明らかにした。特に大きな成果を見せたのは、audienceに対する意識であり、それはspeakerだけではなく、生徒自身がlistenerに回った際も、一人一人の発表に対するfeedbackを様々な視点から捉えることができていた。
- 難しい表現を使おうとしていたので、CEFRA1, A2レベルの易しい単語を使用して表現するようにフィードバックを行った。また、和製英語の使用が目立ったため、適切な表現を提示した。既習事項の定着、既習事項を使用した新しい表現方法の習得につなげることができた。生徒同士の学び合いが促進された。
- スモールグループの形態で、それぞれ項目をシートに提示したものをを用いて、行った。良いスピーキングを目指す、とぼんやりとした目標ではなく、どのようなスピーキングをすべきかを、生徒自身で明確に理解できた。そのために必要なスキルは何か、確認できた。

3. 語彙指導

- 導入と想起練習の組み合わせは、生徒にとって記憶定着と実生活への応用力の向上に効果的でした。分散練習により学習内容を繰り返し思い出す機会を得た生徒は、語彙の理解が深まり、授業以外の場面でも自然に使える自信を得たようです。また、活動の中で「やれそうだ」と思える挑戦(望ましい困難)が適切に提供されたことで、生徒の学習意欲が向上し、楽しく学べる環境が整いました。
- 状況やイメージを連想して単語を覚えることで「長期記憶によりとどまるようになった」と生徒の感想から得ることができた。
- 今回学んだスモールステップの語彙学習は、生徒にとっても「できる」という感覚を与えることができた。
- 単語を意識的に覚えようとする生徒が増えた。
- 期末考査を経て、(研修で紹介された)活動をしたクラスとそうでないクラスとで平均点が10点も変わったということに驚いた。
- 研修で紹介された単語学習を繰り返すことで、生徒の語彙力が飛躍的に伸び、模試の平均偏差値も本校の過去5年間で最高の成績となった。
- 単語に何度も触れるようにしたことで、定着度が上がったように感じました。また、単語の確認や音読を続けていたことで、その後に行ったアウトプット活動でも学習した語句を使用できる生徒が増えてきました。
- ペアで教えあったり、クラス内で競い合ったりする事で、学ぶモチベーションを保つ事ができた。

4. 書くことの指導

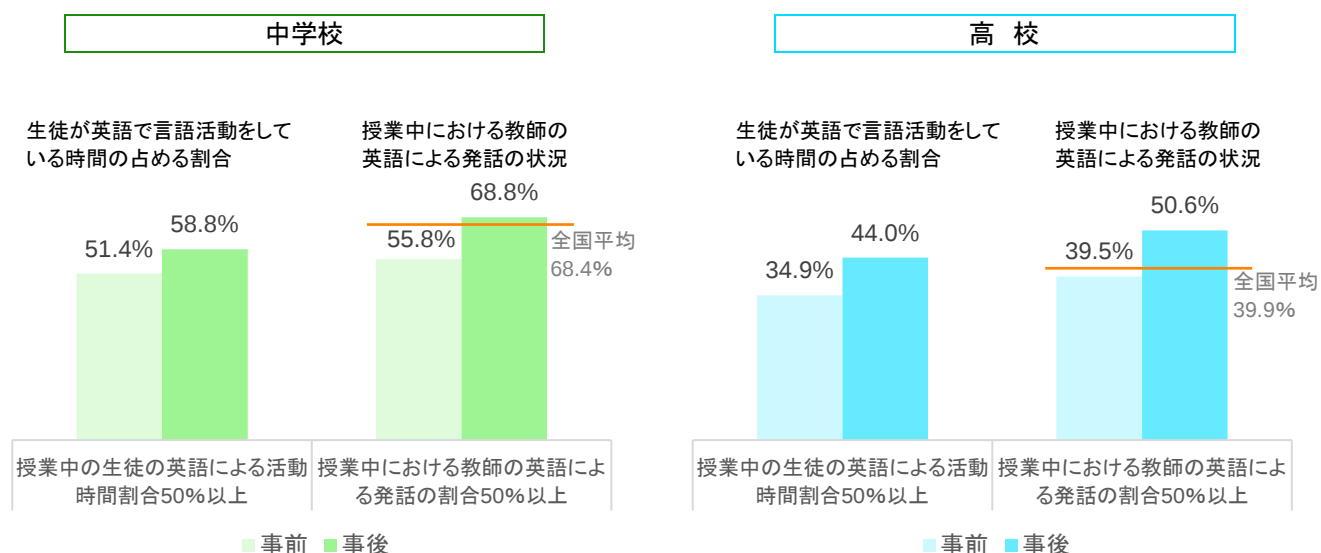
- 学力に困難を抱える生徒であっても、表現と書き方を分割して指導していくことで、比較的スムーズに英作文に取り組むことができた。また、以前よりも論理的で多様な表現を用いて英作文に取り組んでいる生徒が増えた。
- ペアの英作文を評価する、自分の英作文をブラッシュアップすることで、読み手を意識した文章を書くことができるようになっていきました。
- 書くことを苦手とする生徒が多く、なかなか取り組もうとしない生徒もいましたが、最終的にはほとんどの生徒が苦手とすることをやり遂げた達成感を持ちました。更に数人はもっと頑張りたいと言う生徒もいました。
- 「では、書いて」と丸投げするのではなく、「これなら私でもできる」と思うような小さな成功をたくさん用意することが大切だと思いました。
- 実践に関しては、今までは書かなければならないテーマを与え、すぐに書く活動を始めていた。英語が苦手な生徒は途中で止まってしまい全く進まない状態になってしまうことが多かったが、5つのプロセスを踏むことで、英語が苦手な生徒も止まることなく英文を書くことができていたように感じた。
- ライティングの活動に対して、生徒たちは苦手意識を持っているように感じます。しかし、例文やテンプレートを提示したり、使える英単語や表現と一緒に確認したりしながら段階的に取り組むことで、生徒たちも自信を持って英作文ができることが分かりました。
- 何を書けば良いかをしっかり明示すること、評価の観点をあらかじめ決めておくことが重要である。また、様々なタイプの英作文を行わせることで、場面に応じた表現ができるようになり、ライティング力が身につくことを学んだ。
- 生徒のスキルに見合った支援が可能になり、以前のライティングチェックよりも生徒の意欲が向上しました。

その 4: 研修受講前後の変容

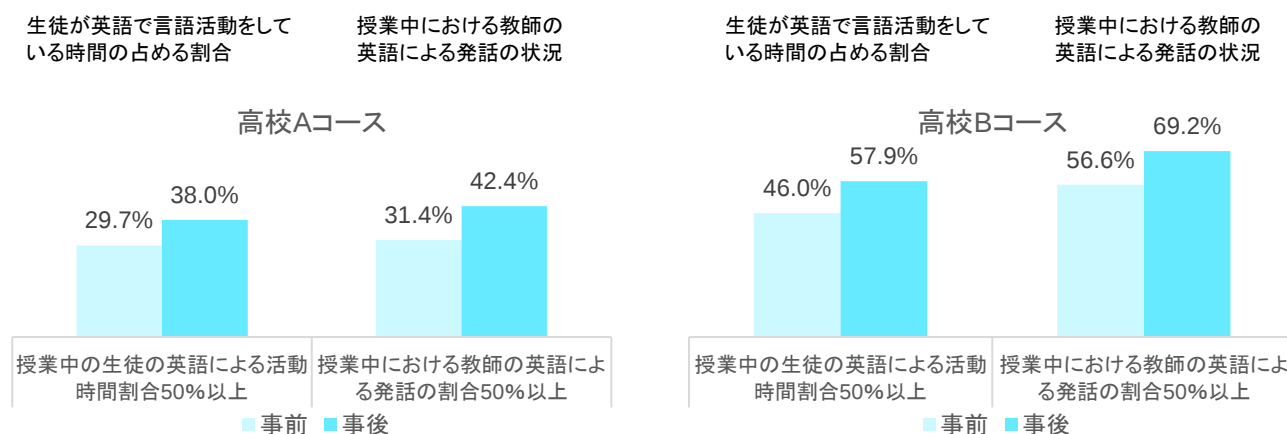
研修前と研修後で 8 分野にわたり意識調査を実施しました。この意識調査は受講者の普段の指導内容や意識等に関する内容で、研修の前後でどの項目にも明確な変化が見られました。その変化を裏付けるコメントも多く寄せられました。

A. 生徒の言語活動や教師の英語使用割合

「授業中における教師の英語での発話の割合が 50%以上」である割合は、受講前は中高とも全国平均以下でしたが、受講後はどちらも 10%以上の伸びを示し、全国平均を上回りました。特にモジュール 1 のワークショップ後に、著しい増加に繋がりました。研修で教師が使用する英語の質にも重点を置き、研修講師がわかりやすい英語の見本を示したことで、教師の意欲が喚起されたと分析しています。生徒の英語での言語活動の割合は全国平均に届きませんが、研修前後で明確な伸びを示しました。



高校のコース別においても同様に変化が表れています。



B-Hの質問については、質問内容について同意する程度、または説明されている活動が、現在起こる程度に応じて、「6 ほとんど当てはまる(90%以上)」～「1 ほとんど当てはまらない(10%未満)」の数字を選択。

6 ほとんど当てはまる(90%程度以上)

4 どちらかという当てはまる(50%程度～70%程度)

2 かなりの程度当てはまらない(10%程度～30%程度)

5 かなりの程度当てはまる(70%程度～90%程度)

3 どちらかという当てはまらない(30%程度～50%程度)

1 ほとんど当てはまらない(10%程度未満)

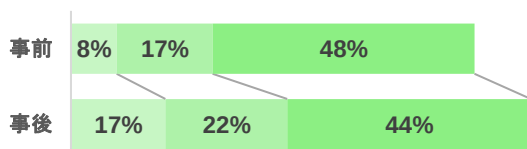
B. やり取り指導

生徒同士が話す機会の実践割合が、中高共に高まりました。書いたものを見ずに即興で話す割合も、中高共に増え、特に中学校においては、「とても当てはまる」という6の割合が倍になりました。高校においても、課題によってワークシートの扱いを変えたり、生徒の状況に配慮したりしながら、即興性を育てる指導への取り組みが進んでいます。

中学校

ほとんど当てはまる 6 5 4

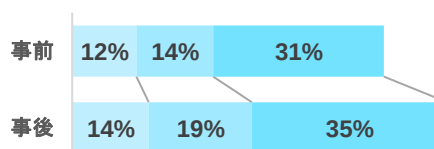
私は、授業中、生徒が英語でお互いに話す機会をたくさんとっている



73% → 83%

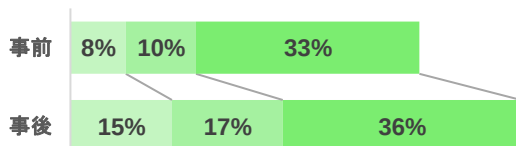
高校

ほとんど当てはまる 6 5 4

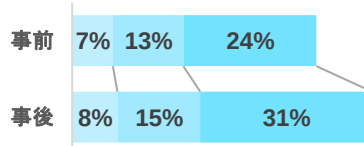


57% → 68%

私の授業の「話すこと[やり取り]」の活動では、私は、生徒がワークシート等を使わずに即興で話すようにしている



52% → 67%



44% → 54%

中学校

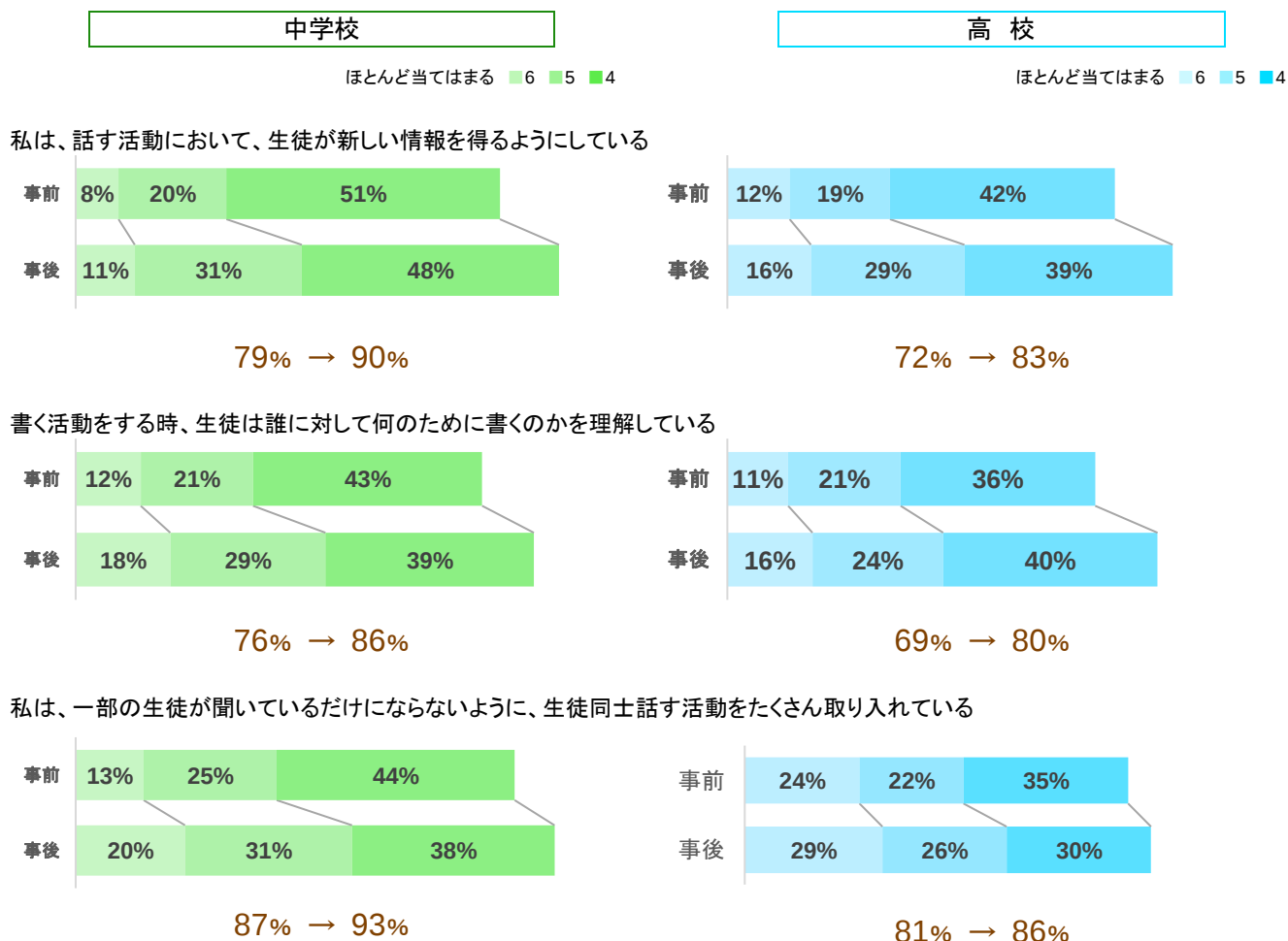
- 今回の研修を受けて、small talk のやり方をブラッシュアップすることができました。
- 年度当初は、どんなに簡単な英文でも見ないと不安がっていましたが、随分改善されました。

高校:

- 以前は話すこと(やりとり)の活動をなかなか入れることができずにいましたが、研修を受けて(私の心理的な)ハードルが下がり、時間が増えました。
- 事前準備の大切さを研修で学び、体験できたので、教員側の事前準備が十分であれば、ワークシートを使わずに「やり取り」ができるようになってきた。

C. コミュニケーション

受講前からペアワークやグループワークを取り入れ、コミュニケーションの必然性などに配慮している教師が7割いました。受講後は6と5の割合が増え、さらに充実したことがわかります。



中学校

- 目的場面状況は意識をして提示をするようにしています。また、全体で英語表現を広げ、深められるような授業を目指しています。
- 書くことや発表については、場面設定や対象を必ず明確にし、生徒たちのモチベーションが上がるものになっています。

高校

- 言語活動を行う際には、コミュニケーションの必然性を意識しています。生徒同士が言語活動を通して新しい情報を得られるよう、お互いに知らないであろう事柄(コミュニケーションを行う意味のある事柄)を話題として選定するようにしています。
- 話したり書いたりする活動においては、テーマ設定やインフォメーションギャップを活用し、情報によってモチベーションが上がるように意識している。
- 各活動の目的(goal)を明確にし、わかる(聞いたり・書いたり表現したりできる)喜びを感じられる活動を取り入れるように心がけている。

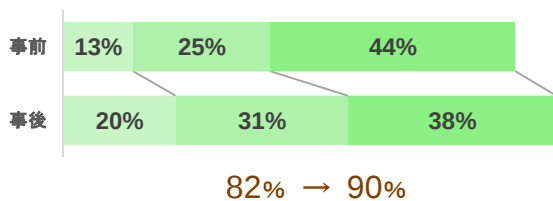
D. 自己関連性

高校では教科書と生徒の内容を関連付ける工夫をしているという声が多く聞かれました。自己関連性も、受講前からかなりの教師が実践していましたが、受講後は6と5を選択する教師がいずれの質問・校種でも、50%を超えました。

中学校

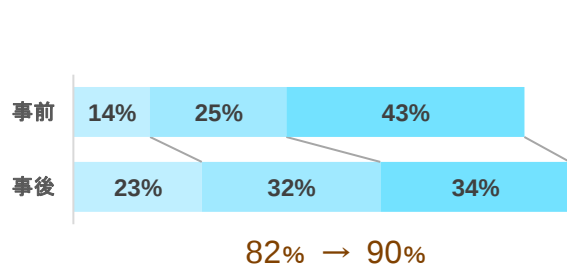
ほとんど当てはまる 6 5 4

私は、生徒の生活と授業のテーマが関連するように工夫している

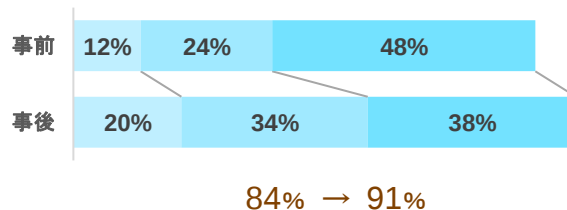
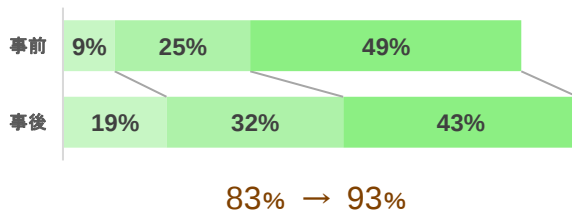


高校

ほとんど当てはまる 6 5 4



私は、生徒が自分の考えや経験、気持ちを話すように工夫している



中学校

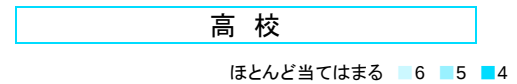
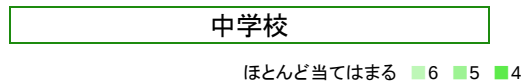
- 「言わされている」ではなく、「言いたいことを言える(表現できる)」を一番大事に授業実践をしているつもりです。
- 自分のことになると、生き生きと活動に取り組む生徒が多いので、なるべく「私のこと」を伝えることがだいじなのかなと思っています。

高校

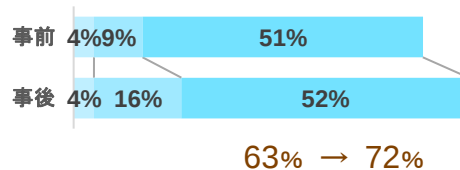
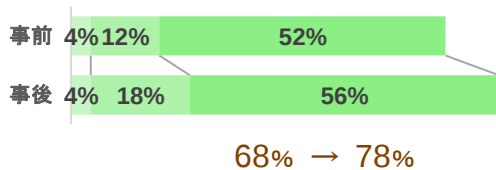
- 授業テーマを設定する際には、できるだけ生徒の実生活や興味に関連するようにしています。また、生徒自身の考えや経験、気持ちを話すようにするために、考える時間やペアでの活動やフィードバックのステップを適切なものにしようと考えています。
- 教科書題材と自分、自分と友達、教室と世界など、知識や体験がつながるようにつながるように授業構成を考えます

E. 生徒のモチベーション

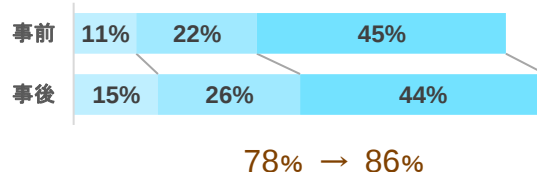
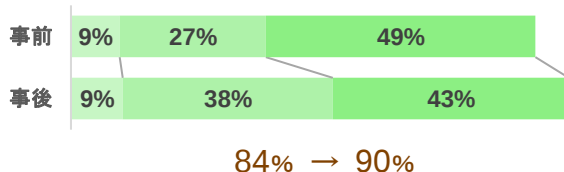
「話す活動は楽しそうだ」という声が多く聞かれ、そこには教師が務めて多くの工夫をしている様子が見て取れました。話すことに比べて、書くことに対する苦手意識が多く聞かれました。これは書くことの研修内容がコースの最後であり、授業実践の時間の少なさと関連があるかもしれません。今後に期待するところです。



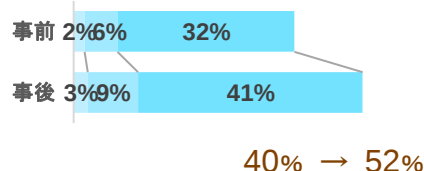
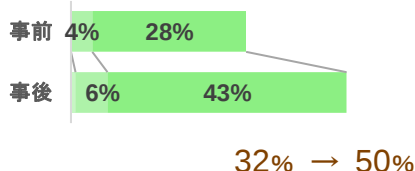
全体的に、生徒は英語の授業を楽しみにしている



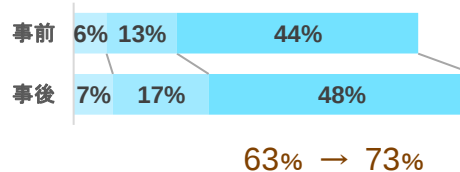
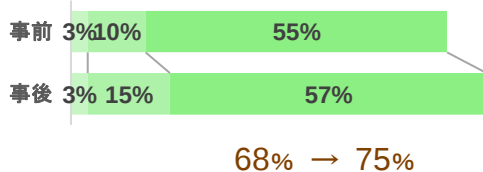
生徒は英語で互いに話をする活動を楽しんでいる



生徒は英語を書く活動を楽しんでいる



生徒は新しい語彙や表現を学ぶことを楽しんでいる



中学校

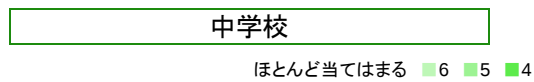
- 生徒同士で学び合う活動を通して、新しい語句を学ぶことを苦手としていた生徒たちも、少しずつ意識が変わってきている
- 学んだ新出語彙の導入を試すようになってから、生徒が語彙を学ぶのを楽しそうに行う姿を見られるようになってきました。思い出す機会を多く設けてあげることが良い動機づけになっているのだと思います。

高校

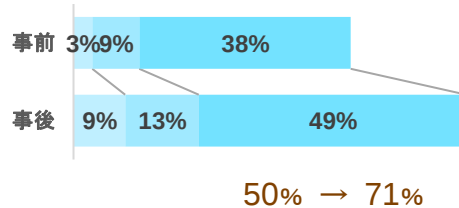
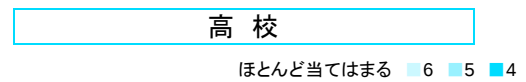
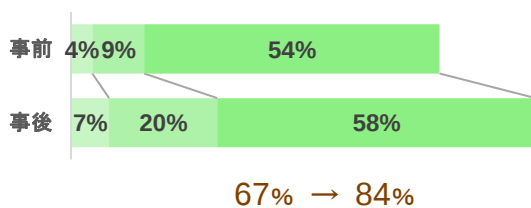
- 一切のストレスや、ミスへの恐怖感が無いわけではありませんが、即興によるやりとりを前向きに取り組んでいるようです。緊張しつつも、相手の英語を聞き取れる喜びや、自分の意見が英語で理解された瞬間に達成感を味わっているようです。
- 「単語が分かってきて楽しい」と伝えてくれる生徒が複数いるので、言語活動と合わせた指導の効果だと実感している。

F. 生徒の上達

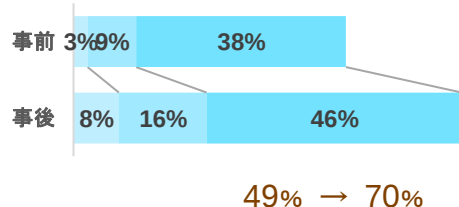
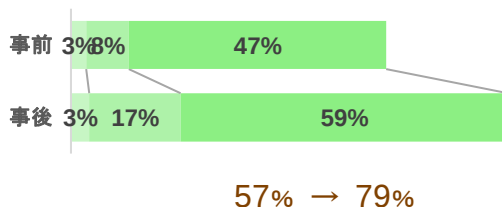
「研修で習った方法を取り入れているところ」「成果が出てくるまでには時間が必要」という声もありますが、徐々に実感する声が増えています。



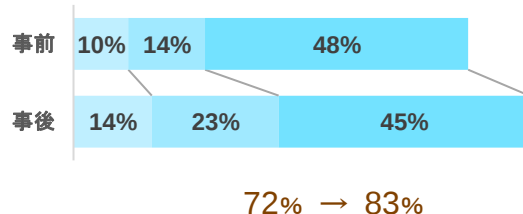
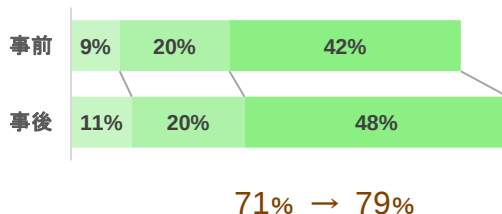
私は、生徒の話す力が上達しているのがわかる



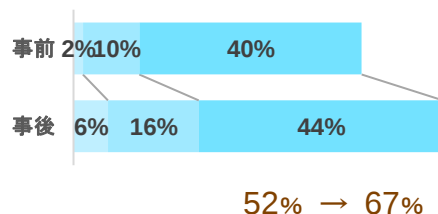
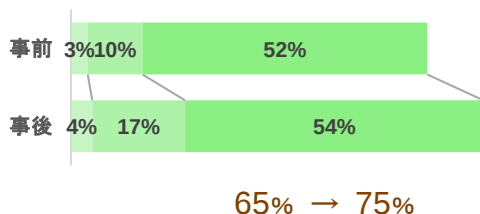
私は、生徒の書く力が上達しているのがわかる



新しい語彙や表現の指導直後に、私は、生徒の理解の程度を把握する



新しい語彙や表現の指導によって、私は、生徒がその語彙や表現を使って言ったり書けるようになってきているのがわかる



中学校

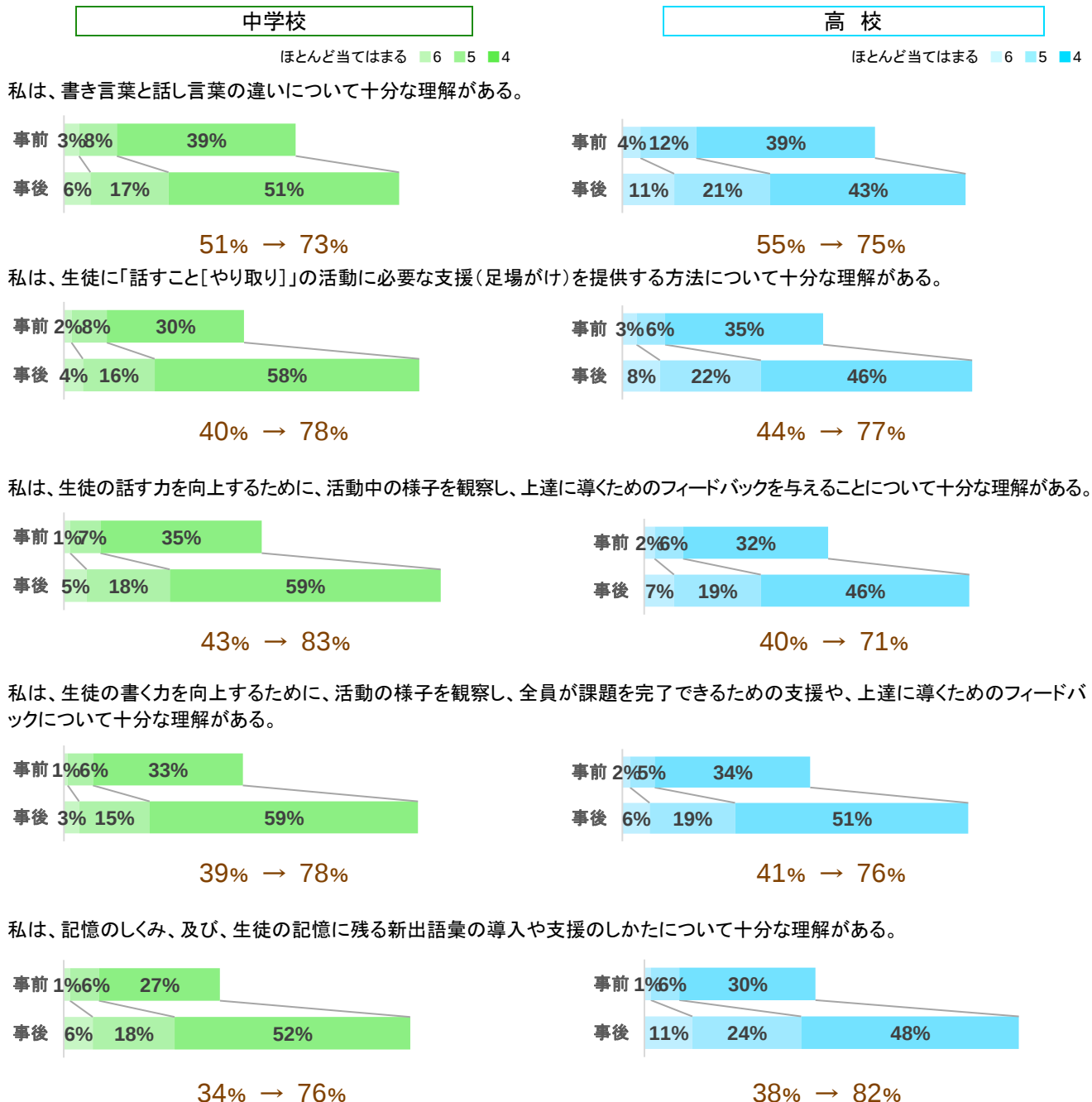
- 今年度スモールトークを授業冒頭で継続しているが、アイデアを考えるスピードや話すことへの抵抗感が小さくなったと感じる。
- 全体的にスペルや文法のミスが減ってきていると感じます。

高校

- 今回の研修で習った方法で新出語彙の定着は工夫するようになった。こちらの誘導の仕方、新出語彙を使うよう工夫できると思うので、今後も続けていきたい。

G. 教師の指導に関する知識

指導に関する知識は、受講前後で大幅な変化がありました。得た知識をいかにして実践していくか、苦手な部分をどう伸ばすかについて真摯に向き合う教師の姿があります。



中学校

- 生徒の力を上達に導くためのフィードバックについて、絶対的な方法を理解しているかといえば、まだ不十分だと感じています。ただ、語彙や表現など、生徒が理解しやすいように、記憶に残る方法を意識しながら日々指導を行っています。

高校

- 本講座で学んだ内容は十分に理解できた。現在、普段の授業でそれを実践中である。モデルの提示をもっと増やした方がいいと反省中。
- この研修のおかげで、スピーキングや語彙指導の支援について多くのことを学ぶことができ、理解が深まりました。それを実践に活かし、指導力を向上していきたいと考えています。

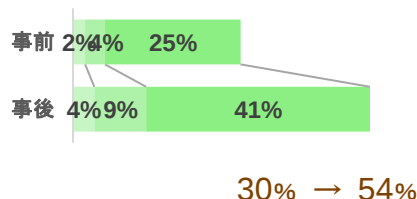
H. 教師の指導に対する自信

コメントから、「自信がある」と答えることに謙虚な様子や、自分に厳しく、現状に満足せず自己研鑽に励む教師の様子もうかがえます。とは言え、いずれの分野においても自信が高まったことが伺えます。

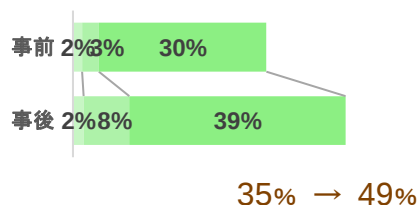
中学校

ほとんど当てはまる 6 5 4

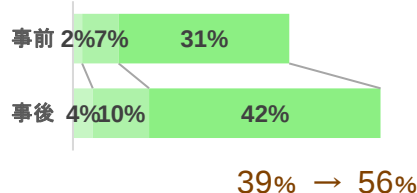
私は、スピーキング指導に自信がある



私は、ライティング指導に自信がある



私は、語彙の指導に自信がある



中学校

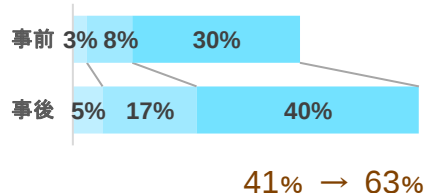
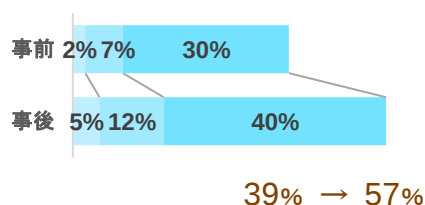
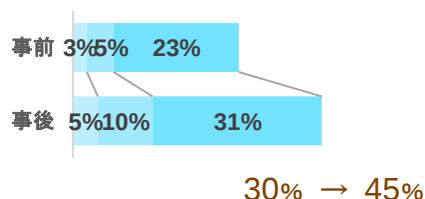
- 今回の研修で、効果的な指導方法について学び、実践したことで、生徒たちの変容が見られた場面が多くありました。しかし、自分の指導技術に「自信がある」と言い切れるところまでには至っていないので、今後も実践を続け、生徒たちの変容の一助となれるようにしていきます。
- 今回の講座で学んだことを自分なりに咀嚼し、繰り返し指導していく中で生徒の成長を感じ、それが自分の成長や自信につながるいいなと思います。
- 今はまだ自信はありませんが、受講する前よりは今後も学び続け指導していきたいというモチベーションが高まりました。

高校

- ライティングの指導については以前から自分自身の弱点であり課題だと感じていたので、今回の研修が自分の弱点克服に効果があったと感じています。今後も継続的に実践していくことが大事だと思うので、得意だと思えるように研鑽を積んでいきたいと思っています。
- 研修で学んだ方法を盛り込むことによって、生徒が取り組みやすくなったと思います。

高校

ほとんど当てはまる 6 5 4



4. 考察

本研修では「やりっぱなし」になることなく、オンライン実施であっても、「指導力を向上する」という事業の目的を達成することができました。定量的にも定性的にも、成果が明確に認められました。

その理由については、以下のように分析できます。

- 1) 受講者の課題やニーズを基に組み立てる
- 2) 教室で使える指導技術を科学的根拠や定説となっている理論と共に示す
- 3) 指導のモデルを提示する（あるいは体験する）
- 4) 受講者の「学びやすさ」に適切に対応した学習教材と学習管理システムを活用する
- 5) 「事後タスク」を設定し、研修と授業が連動するための支援を提供する
- 6) 英語指導・研修運営の科学的根拠を取り入れるとともに、知見や経験の豊かな専門家が関わる

1) 教師のニーズに基づいた内容構成

文部科学省が実施する調査等のほか、ブリティッシュ・カウンシルが独自に実施した調査や授業観察等を踏まえて内容を構成しました。「やり取り指導」に関連して、「語彙力」に言及した教師の声を注意深く分析し、語彙指導を含めました。また教師が授業改善を望む、書くことの指導についても取り上げました。

2) 教室で使える指導技術を科学的根拠や定説となっている理論と共に示す

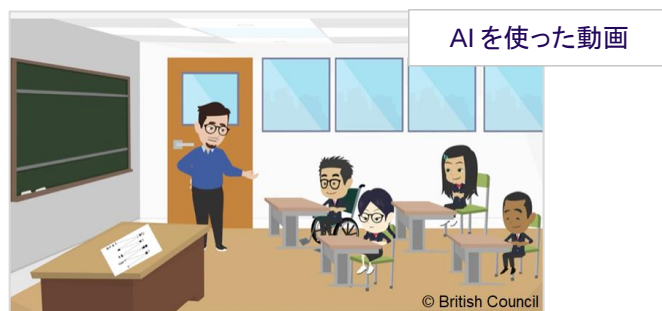
各モジュールでは、科学的根拠に基づき実証済みの指導ノウハウを、日本の教育現場に適した形で紹介しました。「ていねいな指導」「場面に応じた支援」について、実際に教師が授業で使いやすい内容をスモールステップで説明し、具体的な指導方法や状況に応じた支援策も扱いました。根拠があることで、属人的ではなく再現性が高まり、活動やその過程の重要性を理論的にわかることができ、応用できるようになります。

3) 指導のモデルを提示する（あるいは体験する）

言葉だけの説明では、「どのように」行うかがイメージしづらいことがあります。モジュール 1 では講師が実演し、モジュール 2 以降では AI 技術で生成された動画を採用しました。AI 動画は、指導技術の手順や指示語について、わかりやすく具体的に理解できるように作成しています。新しい指導技術の導入時には、（説明を聞いて自分なりに実践する、よりも）まず「よいモデル」を見ることが効果的です。AI 活用の動画については、96.1%が「役立った」（中高平均）と回答しました。



教師と ALT がやり取り(対話)のモデルを生徒に見せている様子



スモールトークの指導風景

- この研修でのアニメーションを使った実際の指導場面がとても役に立った。まねをしてみようと思った。
- 言葉による説明だけでは実際の指導場面のイメージがわからないものも多かったが、動画のセリフを実際に真似てみてイメージを持つことができるようになった。

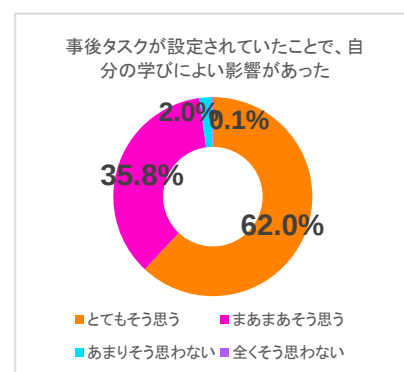
4) 受講者の「学びやすさ」に適切に対応した学習教材と学習管理システムを活用する

オンライン研修では、オンラインプラットフォームの質や教材設計方法が非常に重要です。本研修では、学習科学を踏まえた、良質の学習管理システムを採用しました。また、「情報の詰め込み」や「理解したつもり」にならないように、受講者の認知負荷(新しく受け取る情報を処理する際の負担)に十分に配慮し、効果的な教材設計という観点から専門スタッフが編集し、内容や分量の調節、配列、構成などに工夫がされています。受講者が内容を着実に理解できると共に、能動的に学べるような構成となっているかといった「学びやすさ」に配慮し、教材の質を担保しています。

- とても分かりやすく設定されていたと思います。画期的で学習しやすかったです。
- フリップカード、クイズ、考えてみようなど、いろいろ自分の理解を深められる工夫がされていて飽きずに進めることができた。

5) 「事後タスク」を設定し、研修と授業が連動するための支援を提供する

学習した内容を授業実践に移すための支援として、「事後タスク」を設定しました。「やり方」を理解した指導テクニックや言語活動そのものを実践するイメージです。「事後タスクが実践に役立った」という回答は「そう思う」が98%で、そのほとんどが、「事後タスクが自分の学びにより影響があった」と回答(右図)。また、事後タスクの量についても8割が「適量」と評価しています。



- シンプルで実践しやすい事後タスクであったため、取り組みやすかった。
- 分かりやすい学習をしたのち、事後タスクには教員自身が工夫する余地が残されており、自分の持っている生徒、教材を踏まえて、主体的に取り組むことができました。
- 学んだことを実践する、というのは本当に大切だとわかってはいますが、「学んで満足、終了」となりがちなので、事後タスクがあって良かったです。
- 事後タスクがあることで、実践してみると難しかったりうまくいかなかったり、そして、その一回で済ませずに次回は改善できるように、という気持ちが働いたので、良かったです。

6) 英語指導・研修運営の科学的根拠を取り入れるとともに、知見や経験の豊かな専門家が関わる

指導内容だけではなくオンライン研修の特性を考慮し、構成・方法・教材・成果測定等各分野で、経験豊富な専門家が関わりました。ブリティッシュ・カウンシルの研修講師は、世界中の TESOL/TEFL 関連資格の中でも最も広く認められ高評価を受けている CELTA/DELTA*の保持に加え、日本の英語教育に精通し、全国で教員研修を行ってきました。指導における第二言語習得、学習心理学、インストラクショナルデザイン、プロジェクトマネジメント等々において、科学的根拠(エビデンス)の質の強弱に留意しながら、日本の文脈で何が有効かを検証し、企画運営を行いました。

*CELTA: ケンブリッジ大学英語検定機構が授与する英語教授に関する国際資格

DELTA: ケンブリッジ大学英語検定機構が授与する英語教授に関する国際資格で、大学院修士号と同等資格として認定

5. 課題と今後

全体的に大きな成果を達成した研修でしたが、いくつかの課題も見受けられました。それらは、「オンライン」の特徴に関することで、「研修時間の確保」、「オンデマンド方式に対する理解」、「ICT 環境」に大別できます。

「研修時間の確保」が難しかったという声が多く、一因にはスケジュール設定があげられます。今回はモジュール学習の開始が9月末であったため、授業や学校行事が多い時期と重なり、時間捻出が難しかったという声がありました。

その一方で、「研修時間を勤務時間に設定することが難しい」という声を分析していくと、多くは「オンデマンド方式に対する理解」に起因することが見て取れました。教師の多忙さやスケジュール管理という点よりも、学校や管理職が、研修の形態を狭義に捉える傾向があります。対面研修やリアルタイム式であれば「出張」等の扱いになり専念できる時間が確保されるものの、オンデマンド方式では「出張扱いにならない」という多くの訴えがありました。結果として、勤務時間外に自宅で取り組まざる得ない受講者が多数存在しました。

- 研修内容は楽しかったが、オンデマンド方式なので授業時間外に研修に取り組む必要があり、後半はかなり苦しかった。リアルタイム方式であれば、他教員による補教も依頼できるので、より負担が小さかったと思う。
- 自分のペースで進めることができる反面、本研修を出張として扱ってもらえなかったので、自分で勤務時間内やそれ以外の時間を自分で確保して進める必要があり大変だった。校内や管理職の理解があると、余裕をもって進められるように思う。
- 出張とは形態が異なるため、勤務時間内に時間を確保しているわけではなく、自分の時間で学習していくスタイルとなった。
- 動画の方が見たいときに学習ができと思ったが、実際学校の出張扱いにならないため、結局自宅学習の必要があり、時間を見出すのが大変だった。

「ICT 環境」についても一定数の声が寄せられました。セルフアクセスの学習システムへの接続で、技術的な問題が「時々あった」「頻繁にあった」という回答が2割あり、校務パソコンからの接続ができない、回線の関係からダウンロードに時間がかかる、接続が切れるなどの問題が報告されました。自治体のITシステム(セキュリティ、仮想デスクトップ、無害化処理等)や、不慣れなツールに苦労した受講者もありました。オンライン研修ではICT環境を整えることなどは受講者対応となるため、学び続けるための周囲の支援も必要となります。

また、「事後タスクの実施に同僚の理解が得られない」「実施できる環境にない」という声も一部にありました。今後同様の事業を行う際には、事前周知の方法や内容を工夫するなどして、受講者の学校や管理職、そして同僚の理解と支援を得ていくことが肝要であると考えられます。

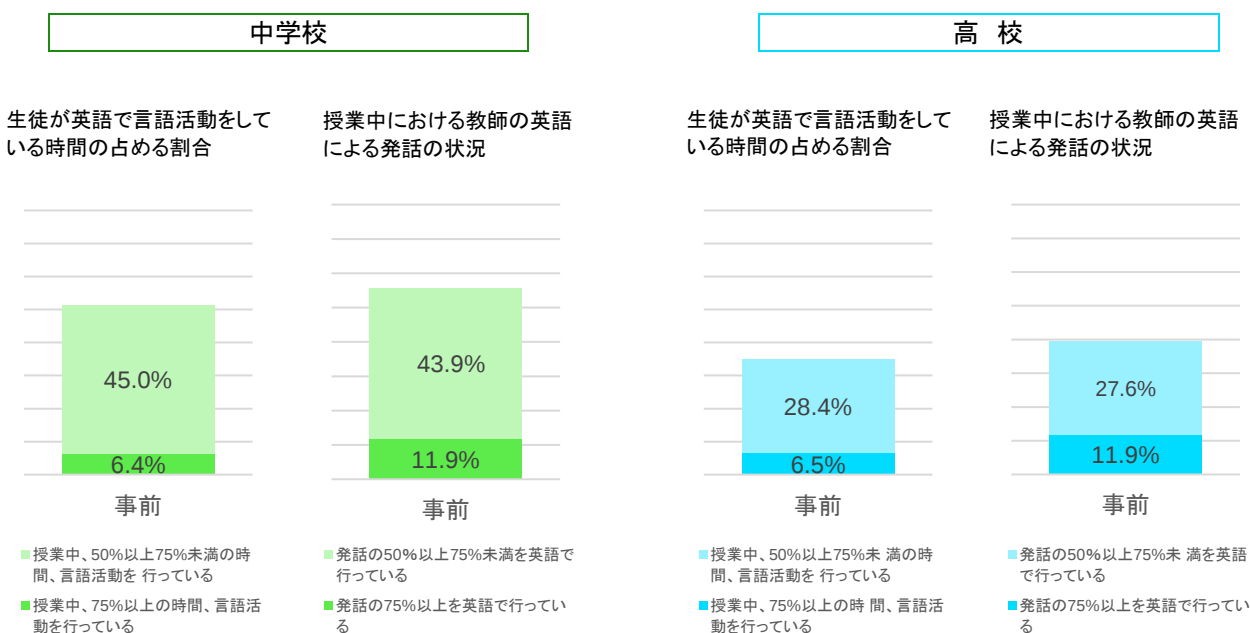
今回の研修では、授業改善についての喜ばしい報告が多く寄せられました。しかし、各学校や教師の環境等により、改善の程度に差があることは否めません。今後改善の継続に課題を感じる、新たな課題に直面する受講者が出てくると考えられます。また事業評価の測定においては、様々な制約により実施しなかった方策があります。例えば、実際の授業の様子を把握する機会を設定していません。また、意識調査は受講講師の自己評価であるため、基準の統一が難しく、生徒への聞き取りも実施していません。加えて、授業改善には、研修以外に考慮する要素(例えば教材)も影響します。今後、本事業の成果や学びを関係者と共有し、日本の英語教育進展のために役立てていければと思います。

付属資料

1) 受講前の意識

この事業では、受講者に事前意識調査を実施しました。選択式の質問とは別に、分野ごとにコメントが寄せられました。そのコメントにあった指導上の課題を以下にまとめました。これらは本研修の受講者に限らず、広く共通する課題であるとも考えられます。

A. 授業中の英語の発話状況・教師の英語使用状況



教師は英語での指示や活動を実践するものの、「英語で指示しても伝わらない」「生徒が英語を理解しない」といった悩みが中学校と高校の両方で最も多く挙げられている。その結果、日本語でフォローする状況が多いことがわかる。

英語で話しても生徒が理解できない	
中学校	高等学校
- クラス内の英語力の差が大きく、簡単な言語活動しか成り立たないため、すべての活動を英語で指示することが困難である。 - 英語で指示をして分からない生徒がいると、説明の時間がかかってしまうと思い、つい日本語を使ってしまう。 - 低学力や英語の積み重ねのない生徒に対し、英語だけでやりとりすることへの難しさを感じている。	- 英語だけで説明するには、まだ生徒の理解が乏しいためどうしても日本語に頼ってしまいます - 生徒の学力の関係上、オールイングリッシュでの授業展開は難しい - 生徒の学力面が追い付かず、最低限のクラスルームイングリッシュしか使えていない課題がある。 - 様々なレベルの生徒が一つの教室で学んでいるため、英語の指示が難しく、どの程度の英語を使って話すべきか迷う。

複雑な内容については、英語での説明は難しいと感じられており、特に文法は日本語に頼っていることがわかる。教師の英語力や指導スキルに不安を持つ声もあり、結果的に日本語による言い換えを多用。

文法など、複雑な内容は日本語に頼ってしまう	
中学校	高等学校
- 文法事項の説明なども英語でなるべくしたいと思っているが、日本語になってしまっている。 3年生は文法事項も複雑なため、どうしても日本語で説明しています。 - 簡単な指示等は英語で行っているが、活動の説明などは日本語になることが多く、特に文法指導では顕著になると考えている。	- もっと英語で教師自身が発言したいと思っているが、文法の説明になると日本語を使ってしまう。 - 基本的には英語のみで授業を進めていますが、文構造の説明や活動のルールは日本語で説明することが多い。 - 指示のみ英語になってしまう。文法解説等を英語でスムーズに説明できない。

生徒の英語の発話活動時間が取れないという意見も見られたが、背景として定期試験や受験指導などに時間が取られている模様。一方で、英語で話す時間をもっと増やしたいという意欲はあり。

生徒の発話活動時間が取れない	
中学校	高等学校
- 子供達が自分のことや考えを話す時間や場面を十分に取れていない。 - 文法の説明や決まった練習が多くなり、自己表現につながる実践練習が少ない。 - 生徒たちに言語活動をさせたいが、小テストや問題集を進めなくてはいけないので、なかなか時間が取れない。	- 生徒が発話する時間が十分に取れていないと感じている。 - 今年度は高校3年生の授業が多く、受験指導中心の授業となっているので、生徒も私も英語を発する機会が少ない。 - 言語活動の量の確保に課題があります。帯活動でできる限り確保に努めますが、受験指導的な側面との兼ね合いに苦慮しています。

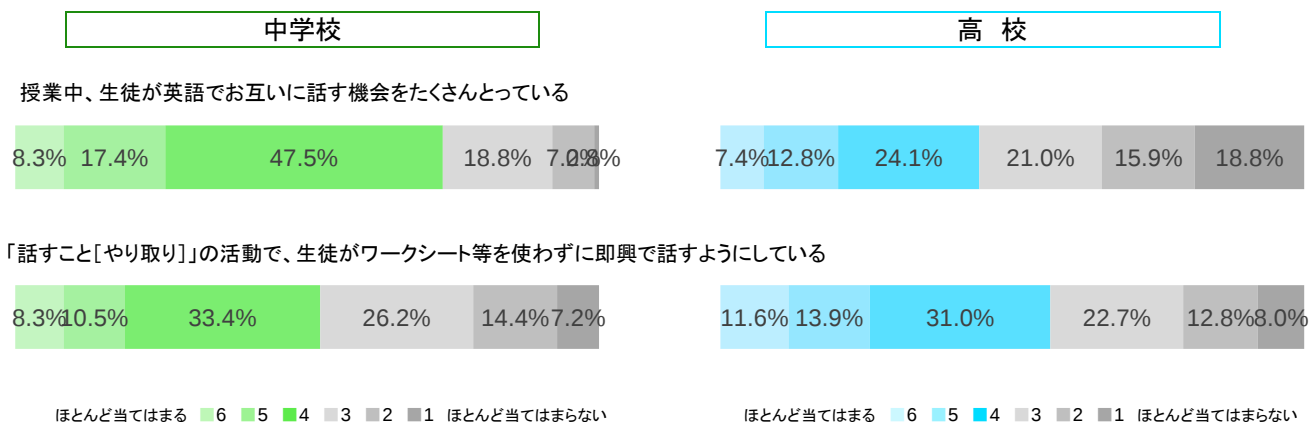
支援学級での英語指導や、母語が日本語以外の生徒への英語指導など、他にも様々な悩みを抱えていることがわかる。中学校より高校で顕著。

様々な事情を抱える生徒がいる	
中学校	高等学校
特別支援学級で行なっているので、自分も交流学級で授業を行うときよりも日本語の使用が多くなっている。	- 定時制のため、母語が日本語でない生徒も多く、他の学校と単純には比較できない。 - 現在の勤務校では、中学校まで不登校だったり、特別支援教室に在籍したりしていて、英語をほとんど学習しないまま入学してくる生徒や英語嫌いの生徒が多く、英語を使うことへの拒絶反応への対応に苦労しています。

上記のような悩みと共に、「英語を話す時間をもっと増やしたい」という教師の声が寄せられた。

- 生徒が英語で言語活動を行う時間をもっと増やしたいと考えている。(中)
- もう少し、教師も生徒も英語を話す機会を増やしたい。(中)
- 学校が変わって、なかなか英語で授業をすることができなくなってしまった。受験を意識しながらも本当は英語でやりたい。(高)
- できるだけ英語での発話や生徒の英語での言語活動を多くしたいと思っています。(高)

B. やり取り指導(スピーキング)



「即興性の乏しさ」について悩む声が最も多い。生徒の英語力の低さから、つい例文を用意してしまう。しかし、生徒がその例文を見ながら話すことで即興性が失われるという悪循環が生じている。

即興性の乏しい指導内容になっている	
中学校	高等学校
- Small Talk をほぼ毎時間行うようにしているが、生徒の発話が止まることが不安で型を示してしまいがち。 - 生徒はある程度の形に添って話をしているため、言語活動と言えるのかは疑問の部分が自分でも多い。しかし、使ってほしい内容等を考えると、このような形になっているという現状である。 - 生徒たちが自信をもって発話できるよう、ワークシートを使ってやり取りや発表等の活動をしています。なるべく見ないようにとは指導しているものの、生徒たちもワークシートに頼ってしまうことが現状です。	- 何かしらのフォーマットを示さないと言語活動が成り立たない生徒が多い - 授業中の対話練習も、どうしてもプリントに準備させてからの活動になることが多くなってしまふ。ヒント等を多く示しすぎてしまふ。 - 即興で英語を発話する語彙レベルに無く話も止まってしまうため、お手本を作る必要があります。 - やり取りの例文を提示し、一部を自分のことにアレンジするように指示しているが、現状はそのまま読む生徒が多い。

英語でのやり取りができていない・時間が割けない、という悩みも多い。中学校教員からは、テーマ設定も含め、事前準備に時間がかかるという声も。

時間がなく、活動ができていない	
中学校	高等学校
- 即興で話す機会を作っていません。生徒が黙ってしまうのが怖いです。 - そもそもあまりやりとりの活動ができていない。やるとしてもプリントに書いたことを言わせていることが多い。	- 文法を理解させてから会話に取り組んでいるので、時間的な量が不足しています。 - 定期テストの範囲が広く、オーバーラッピングやシャドーイングをする時間がない。 - 即興で話せる英語力がなく、そのための練習もほとんどさせてあげられていません。授業は教科書の語

即興で話すと、生徒が聞き取ることに時間がかかり、授業進度への不安からワークシートを読み上げる形になりがちです。	彙・本文解説・内容理解・付属問題集を丁寧に解説し、音読練習で手一杯です。
---	--------------------------------------

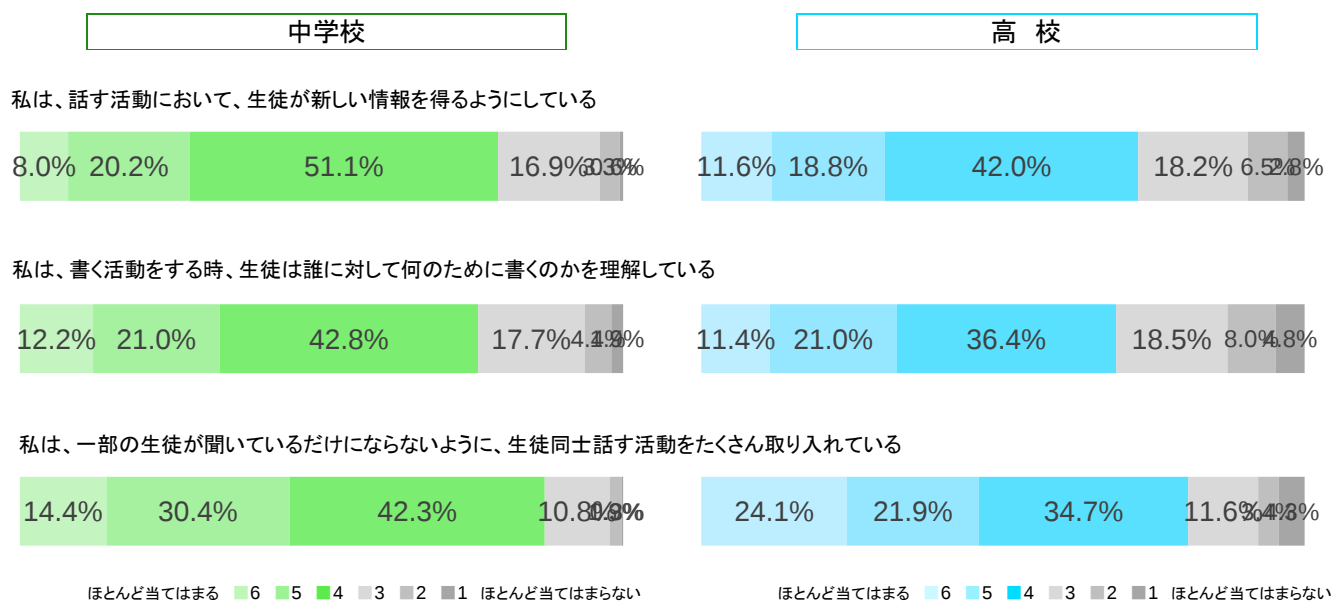
やり取り指導の指導方法が分からないという回答と共に、即興だと教員からのフィードバックができない・難しいという指摘も。

指導方法がわからない・フィードバックができない	
中学校	高等学校
「即興」を意識して取り組みたいが、実際はその指導のやり方がわからず、困っている。 - 即興でのやり取りは、かなりハードルが高いと感じています。どのように指導すればいいのかわからず、生徒の力を育成できていないと感じます。 - 即興で話す場面で、生徒の活動で使われる英語の正しさのレベルを上げる指導ができていないと感じている。 - 最初にペアでスモールトークをすることがありますが、やっただけになってしまっていてフィードバックができずどうしたらいいかわかりません。 - 例文を提示している。生徒が自由に考えて表現できるような工夫がしたい。	- 即興で話せるようにするにはどのような段階を踏ませるかを学びたいです。 - 即興で会話させると、フィードバックしにくいのでどのようにしたらよいか。 - まずは何も見ずに取り組んで、言いたくても言えなかったことをメモするように指導しています。ただ、メモで終わっていて、その次につなげるところまでできていません。 - 即興の楽しさみたいなものはあるようで、盛り上がるが、全く何を言ってよいのか分からず、つまらないような生徒もいて、彼らに対するフォローが知りたい。

特に中学校でよく聞かれたのが、「事前準備が大変・難しい」であった。

- 即興にいたるまでの準備が非常に大変なため、そこに時間がかかってしまっている。ワークシートをいかに工夫するかがキーポイントであり、その活動に持っていくまでのプロセスが難しい。
- 導入・練習の段階で、足場掛けを外すのがまだあまり上手くないなと感じています。生徒が不安にならず、挑戦できると感じる程度の即興的なやり取り場面を設定できるようになりたいです。
- 即興にいたるまでの準備が非常に大変なため、そこに時間がかかってしまっている。ワークシートをいかに工夫するかがキーポイントであり、その活動に持っていくまでのプロセスが難しい。

C. コミュニケーション



「誰に何のために書くのか明確にして書かせる」「話す活動において、生徒が新しい情報を得ようにする」という意識がそもそもなかった、という教員が中高共に存在。

書く相手や目的・意図などが曖昧なまま書かせている	
中学校	高等学校
- 書く活動の時に、「誰に」に対して「何の」ために書くのかまで、配慮していないことが多い。 - やりとりをさせる時の狙いが曖昧なときがあるということに、こちらの設問を通してハッとさせられました。何のために話しているか、「目的・場面・状況」を適切に設定したいと思いました。 「書く相手を意識して書かせる」ということはあまり意識していませんでした。大切です。	- クラスで発表するため、とか、提出するためという目的になっており、実際の場面や状況において書く必然性があるものは、書かせられていない。 - 何について書く、ということは気をつけていましたが、いつも「読み手」としか伝えておらず、それが具体的に誰なのか提示したことはほとんどなかったので新しい視点でした。 - クラスで発表するため、とか、提出するためという目的になっており、実際の場面や状況において書く必然性があるものは、書かせられていない。

生徒に新しい情報を与えられていない

中学校	高等学校
- 話す活動では情報伝達を意識できていないことが多く、反省しています。 - 生徒が新しい情報を得るための工夫ができていない。	「話すときに生徒が新しい情報を得られるようにする」というのは今までにない視点であった。詳しく知りたい。 - 質問文にあった、新しい情報という視点が、自分の授業では欠けているように思いました。

話す活動においてはペアワークが多く取り入れられていた分、特有の悩み・課題がみられた(評価の困難さや組合せの偏りなど)。また、生徒が英語を話せない、という声も多い。

ペアワークを行ううえで様々なことに悩む

中学校	高等学校
- 全員がしゃべっているときは、それぞれどういう発話が行なわれたか、評価しづらい。 - 発話のチャンスを多く設定しているが、それで力が定着しているか疑問です。 1クラス3人の少人数授業なので、生徒同士話す時間の設定はできるが、話す相手や書く相手は限られる	- 生徒はプレゼンテーションを楽しんでいる。フィードバックを工夫し、やる気を維持している。クラスサイズが大きいとプレゼンで時間がかかり、回数をこなせないのが現状、悩みの種である。 - できる限りいつもペアを変えたいと思っているが、人間関係を考えると難しいこともある。

生徒が英語を話せず、日本語での会話になる

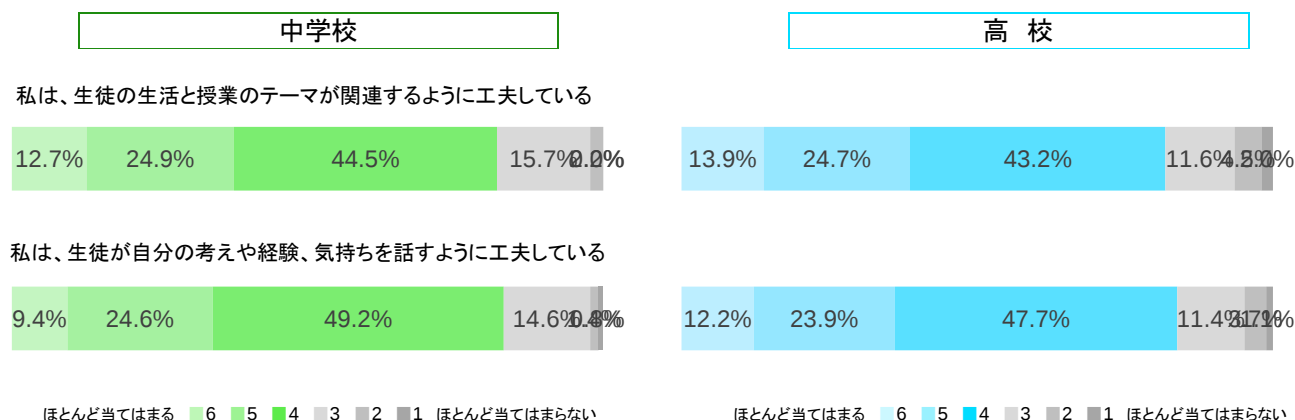
中学校	高等学校
- 生徒同士で話す機会と言っても日本語のことが多い - 生徒同士で相談する時間を設けるようにしているが、できる生徒は話すができない生徒はなかなか話せない状態が続いている。	- ペアワーク、グループワークは取り入れるが、日本語で話す時間が多い。 - 新しい知識や語彙を紹介して、すぐに話すことは難しいように思います。 - 生徒たちが協力する場面はあるものの、ほぼ日本語で行われているのが現状です。

英語を話す・書く活動の時間の無さは、前問に続きこちらでも挙がった。

英語で話す/書く機会が少ない

中学校	高等学校
- 互いに話す活動では、まとまった時間で行うことができていないので、そこを改善していきたい。 - 書く活動は未実施	- 書く活動については、授業内で時間を十分にとることが出来ていないのが現状であり、今後その点を充実させるにはどうするか考えていきたい。 - 生徒の言語活動の時間を多く取るようにしていますが、まだ不足していると感じます。 - ほとんど話す活動、書く活動ができていないので上記のような回答です。

D. 自己関連性



授業のテーマと生徒の生活との関連付けに苦慮している。特に高校教員は、さまざまな工夫を行っているものの、まだ十分ではないと考えている。

工夫しているが関連付けが難しい	
中学校	高等学校
- 文法導入時に意識していますが、毎回うまくいきません。 - 教科書の内容とリンクをさせながら授業を行っているので、一概に授業のテーマが生活と関連しているとは言い切れない部分がある - 生徒の生活と授業テーマをつなげることがなかなかうまくできていません。	- 工夫しようとしているが、実際にはあまりできていないような気がするから。 - 題材について身近に感じたり世界に目を向けたりできるような情報を与えるよう心がけているが、必ずしも英語を活用できていない。 - 心がけているが、まだ考えや経験を英語で表現できるところまでは到達できていない。単語レベルで語彙を増やしている状態。 - 授業テーマと実際の生活が乖離している側面が多々あると思うので、自分事として捉えることのできる英語表現や、自分が表現したいのはこれだと思える英語を授業内でもっと増やしたいと思っています。

関連付けについて、特にテーマ設定に悩む声が散見された。特に高校教員は、教科書が実生活とかい離しているとしてテーマ選びに苦労。また、時間に追われ、会話の機会を取れていないという声も。

テーマ設定が難しい	
中学校	高等学校
- 生活と結びつけられる時と結びつけられない時の差が激しい - コミュニケーションをとる目的や場面状況を考えながら活動を考えているが、思いつかない時もある。	高校の授業になると抽象的な内容も多く、経験が話しにくい場合もある。

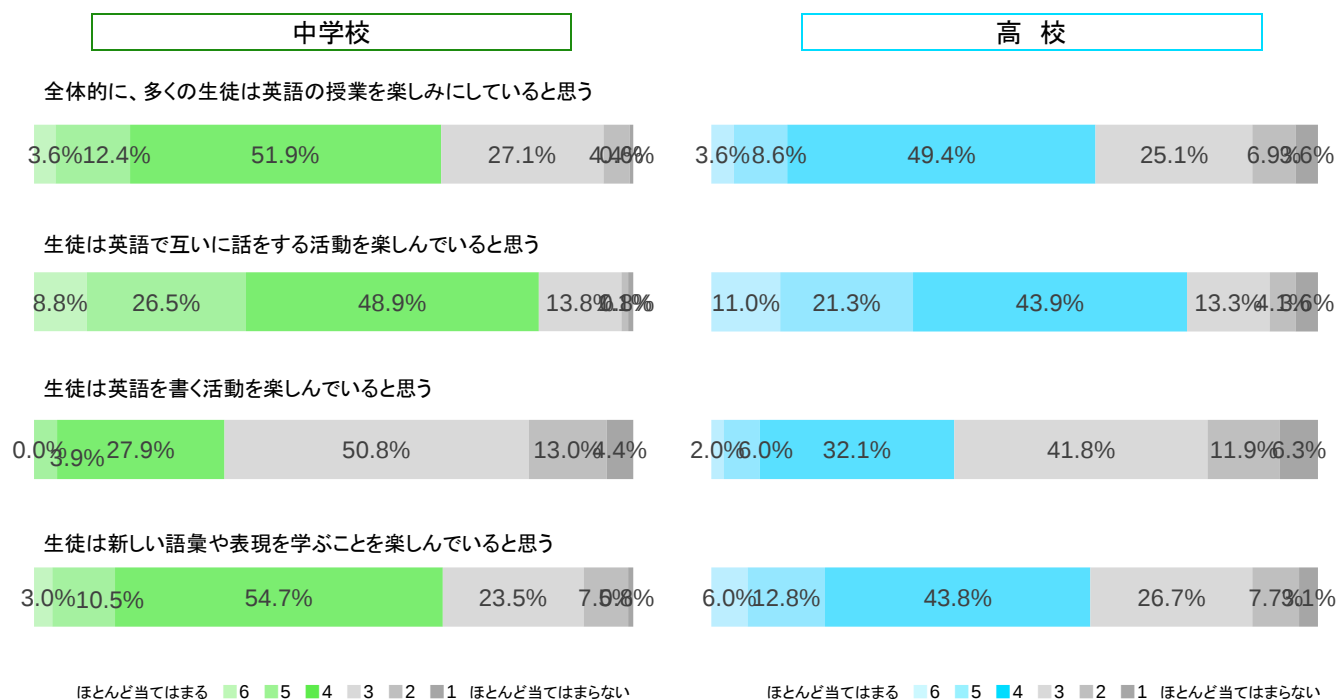
生徒が興味をもてるテーマで授業を進めていきたいと思っているが、なかなかネタが見つからないことが多い。	- 単元によっては生徒の興味関心と関連付けるのが難しい。つながりを見つけられる発想力を身につけたい。 - 検定教科書を使わなければならないので、なかなかタイムリーな話題を取り上げるのが難しいところです。
--	--

機会があまり取れていない	
中学校	高等学校
- 自分の生活について当てはめるようにしているが、扱う英文や語数などが短く、会話量が少ないという反省がある。 - 自己表現の場が少ないのが悩みです。今後もっと増やしていきたいです。	- 時間に追われて、生徒に問いかけることを忘れてしまうことが多い。 - reading が二単位しかなく、教科書の進度をはやめねばならないため、なかなか会話の時間をとりにくい。 - テスト範囲を考えると、授業は教科書の解説が中心になってしまっている。

生徒について、そもそも自分の意見がない、あっても表現できないという指摘が多かった。特に中学生はその傾向が強い。また、高校生は、考えや感情の英語表現が未熟な様子も見受けられる。

生徒が自分の考えを表現できない	
中学校	高等学校
- 日本語でも、自分の考えや気持ちを伝えることが難しい生徒が多いと思う。 - 考えや経験を日本語で表現する生徒が多く、そもそも言いたい内容がないという生徒もいる。どうしても内容がない生徒は選択肢を与えて選ばせるようにしているが、何が正解なのかわからず悩んでいる - 生徒の生活と授業のテーマが関連するように工夫することで、生徒が授業の話題を身近に感じ、主体的に学ぶことにつながると考える。そのため、教科書の題材につながる生徒の身近な話題を見つけて導入したりしている。しかし、発問において、教科書の内容理解などは事実発問に偏りがある。推論発問や評価発問を用いて、生徒が自分の考えや経験、気持ちを話すことができるような工夫は十分にできていないと感じている。 - 生徒の生活や、教科書の題材と関連付けて単元到達目標を作っています。生徒自身の考え等については、考えを持つ生徒もいれば、そうでない生徒もいます。この差が大きく、考えを持たせるための教科横断的指導が必要だろうと思っています。	- 考えや気持ちを英語で表現できず、諦めてしまう生徒が多い印象がある。 - 英語でより、日本語での感受性、表現力も重要だと考える。母語で考えられないものは、外国語ではさらに難しくなる。 - できるだけ実体験に基づいて話すことができるようにしているが、気持ちや感情の表し方が限られた形容詞しか使えない場合が多い。 18 の設問について、話したいことがあるものの、語彙力や文法力等の総合的な英語力の低さによって、表現しきれない場面に遭遇することが多々ある。

E. 生徒のモチベーション



「生徒が英語に苦手意識を持っている」という意見が非常に多い。英語を難しいと感じるタイミングは人それぞれだが、一度苦手意識を持つとなかなかそれを払拭できずにいる。

英語が難しいと感じており、苦手意識がある	
中学校	高等学校
- 苦手、不得意だと感じ、英語の学習を楽しむことができていない生徒が多い。日々の授業で「わかった」「できた」という達成感を積み重ねていけるようにしたい。 - 今年度より職場が変わり、生徒と4月から対面した。非常に英語に対する苦手意識があるため、かなり授業を進めるのに苦労している。 - 英語が苦手で小学校から上がってきた人たちは、英語は結局難しいものとして意識され続けてしまっている。 - 中には意欲的な生徒もいるが、英語を学習する必要性を感じないことや、点数が取れないことから苦手意識を持っている生徒が多い。	- 勤務校では入試の段階から、英語が苦手な生徒が非常に多い。そういった英語を苦手とする生徒たちに、楽しい授業ができているとは思わないから。 - 英語に対して苦手意識が強い生徒が多く、どの活動においても楽しんでいる様子はあまり見られないように感じている。 - 苦手意識が高いので楽しみだとは思っていないと思う。でも、ALTの授業は楽しみにしている。 - 中学校の時点で英語に対する苦手意識を持った生徒が、私の学級(1年生)の9割以上いるのが現状です。 - 新しいことを学ぶというより英語に対する嫌悪感を払拭できていない

生徒は英単語や表現(イディオム)を覚えられず、苦勞している。教員側も、それをサポートするための楽しめる指導について、うまくいかず悩んでいる。

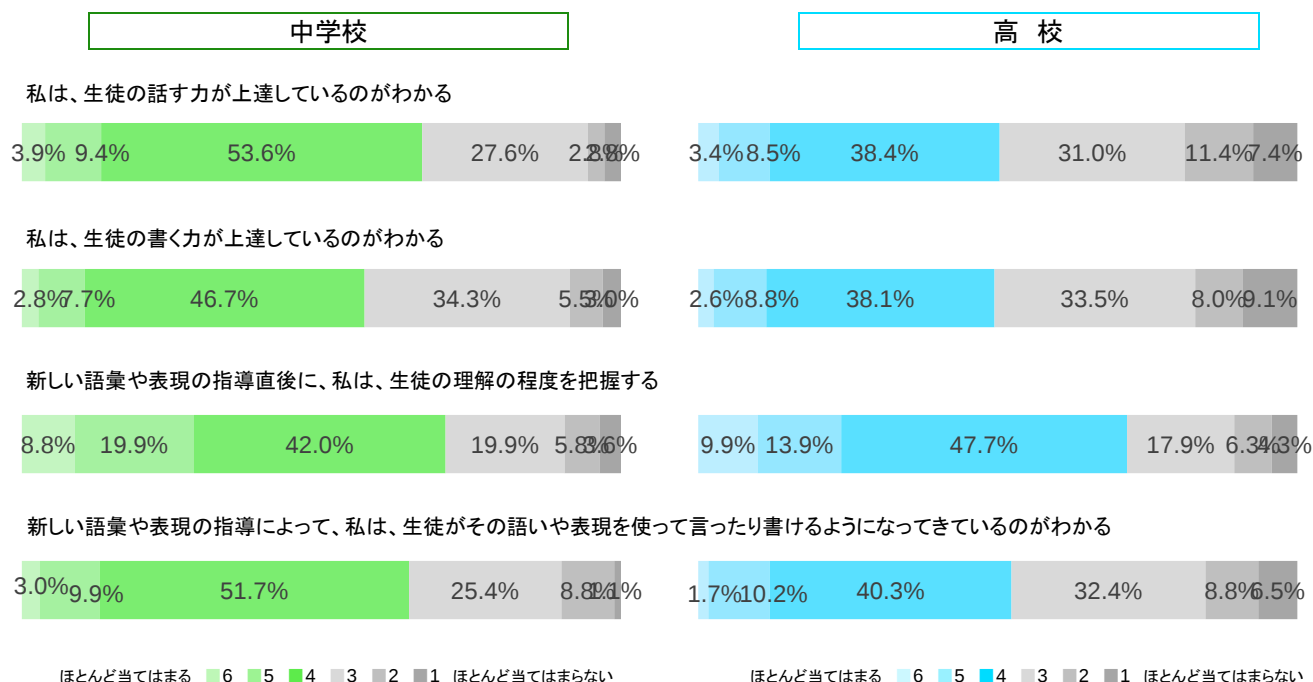
英単語や表現を覚えることが負担	
中学校	高等学校
- 授業中は楽しそうな雰囲気、自分も楽しく進められています。でも、英語は好きでないようです。新しい語彙や表現もその時だけで、なかなか身に付きません。「覚えられない」と言っています。 - 英語を書く活動は、自分の考えを入れて表現するので楽しく取り組めるようです。しかし、新しい語彙や表現を学ぶことは生徒たちには負担に感じているようです。	- 自分の考えを表現することは好きだと感じるが、語彙や表現を学ぶことについては、やや単調な側面もあり、必要に迫られてやっている感じもあると思う。 - 入試問題を解くための勉強となると、とたんに語彙や表現を覚える勉強がつまらなくなる様子です。 - 単語を覚えることに苦戦していて、翻訳ソフトに頼りがちです。ただ、一旦覚えるとかなりの達成感を感じています。

楽しく学習する工夫がうまくできない	
中学校	高等学校
- 英語を学ぶ楽しさを伝えられていないと思う。 - 生徒たちは英語に対する苦手意識を持っています。単語を楽しく覚えるための工夫がうまくできていません。	- 多くの生徒が楽しく学びたい、多くの知識を得たい、英語をたくさん話したい、話せるようになりたいと思っているが、自分がうまく指導できない。 - どちらかというと話す活動の方を楽しんでいると思う。新しい語彙・表現を楽しく学ばせる工夫をしていなかった。 - 語彙力を楽しく身に付ける方法を模索しています。

生徒の「書く活動」への苦手意識を指摘する声が多いが、特に間違えることへの恐れが強い模様。一方、英語で話すことへの苦手意識に関するコメントは少なかった。

英語で文章を書くことに苦手意識がある	
中学校	高等学校
- 書くことに苦手意識を持っている生徒が多いと感じます。話すことは多くの生徒が楽しんで取り組んでいると思います。 - 正確性がより求められている Writing に対して、不安を抱く傾向にあると思います。 - 生徒は書く活動で間違えることを恐れているように感じる。 - 英語を話すことに積極的な生徒は多いですが、書くことに対しては苦手意識を持っている生徒が多くみられます。	- 話すことはあまり躊躇しないが、書くのが苦手な生徒が多い。 - ライティングに対して苦手意識を持っている生徒は多い。 - 発話活動では Accuracy よりも主体的に発話しようとする態度を重視しており、生徒も発話することに抵抗感がない様子である。しかし、Writing になると途端にミスを恐れ、手が止まってしまうことが多い。

F. 生徒の上達



生徒の英語力の上達について、「確認できていない」という声が多数。また、確認・把握しようとしても、その方法や指標が曖昧/分からないという意見もあった。

上達(定着)したか、確認できていない	
中学校	高等学校
- 定着の確認が十分にできていないと感じる。そのときは何となくできていても、定着までは至っていないことも多いので、注意して指導にあたっていきたい。 - 新しい語彙や表現の指導に重点を置きがちで、生徒の定着の度合いの確認が少し疎かになっています。	- あまり測ったことがないです - 生徒の理解の評価が十分にできていない - 指導後の理解度把握や実力伸長に関しては、ほとんど確認できていない状況です。

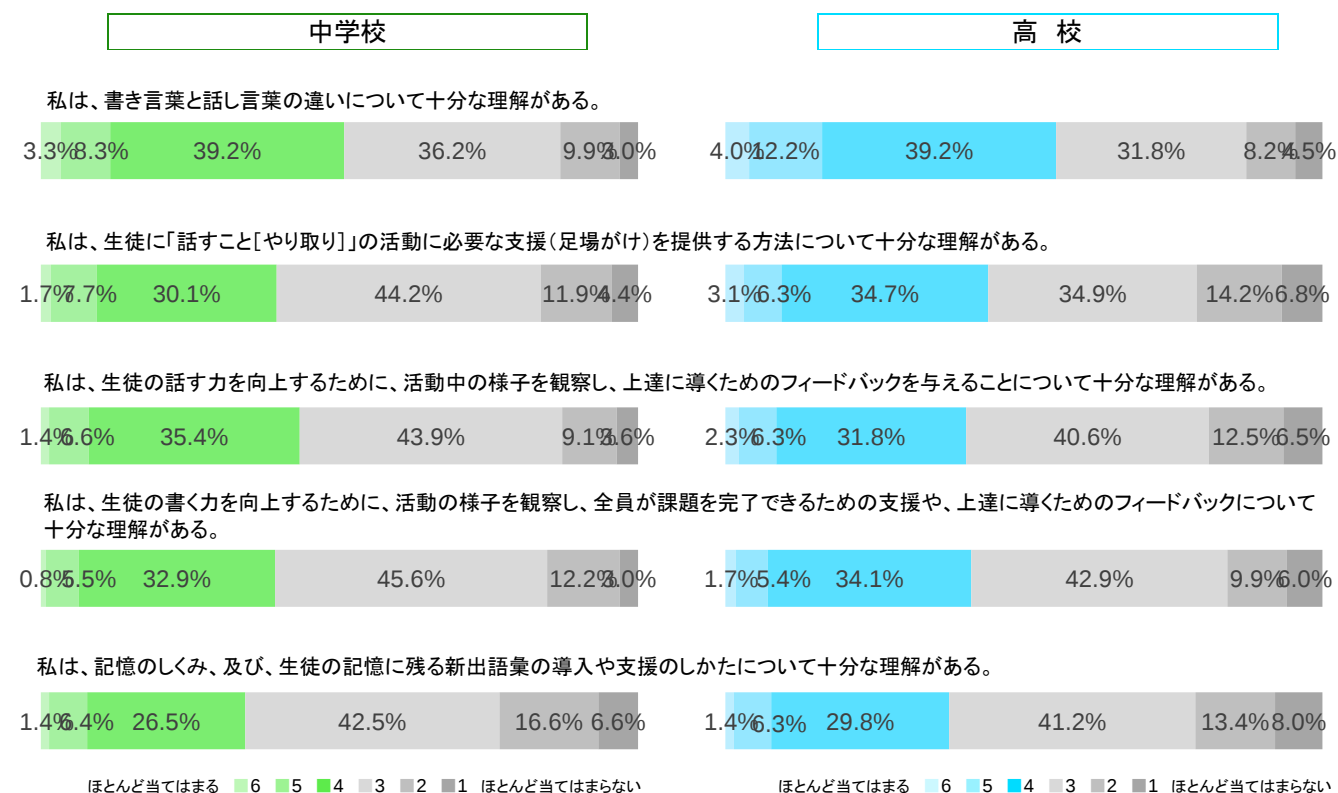
把握方法や評価指標が分からない	
中学校	高等学校
- 評価の仕方が曖昧だと感じる。「記録に残す評価」の機会が少ない。 - 理解度の把握の仕方が、今のやり方でいいのか悩んでいる。	- 生徒の力の上達をどのように測れば良いか不明だ(何となく話してはいるが、それが前回より上達しているかが良く分からない)。 - 評価の仕方に困っています。時間的に効率の良い方法を知りたい。 - 話す力、書く力の客観的な指標がよく分からない。ルーブリックは利用できるが、どちらかと言えば定性的な評価であり、一人ひとりの見取りには時間がかかる。現場でできる定量的な評価があればご教示ください。

「定着しないこと」が、中高教員の大きな悩み。繰り返しや積み重ねになる指導ができていない。「生徒が学んだ内容をすぐに忘れる」という指摘も非常に多かった。

語彙指導がうまくいかず、定着しない	
中学校	高等学校
- 学習直後は自分の考えや気持ちを表現できるようになるが、既習事項を繰り返し練習することが十分にできていないので、定着させるのは難しく感じている。 - 語彙や表現の導入方法が単調になってしまっている。	- 語彙を暗記した後、自分で使いこなせる能動語彙にまで授業内で持っていくのが難しく感じる。 - 語彙や表現はなかなか定着しないのが現状です。定着しないまま別のテーマに進んでしまうのも一因かと思いますが、同じことを繰り返すと生徒が飽きてしまうので頭が痛いです。 - 言語活動がその場限りになっていて、積み重ねがあまりない感じがしています。各レッスンでどのような語彙・表現を生徒が使えるようになってほしいかを自分自身がもっと理解しておかないといけないと痛感しています。

生徒が学んだ内容を忘れてしまう・定着しない	
中学校	高等学校
- 習った直後はその表現を使って書けるが、すぐに忘れてしまい、時間が経つとなにを書いたら良いかわからない生徒が多い - 知識の定着に自信がない。宿題や活動をしない。授業中無気力が何人もいる。話す活動はしても書かせると定着していないことが悩み。	- 前時の内容を全て忘れてしまうので、会話活動が次のレベルへ上がっていかない。 - 生徒は授業内でしか勉強をしないので、新しい表現や語彙を学習しても、使う段階に進むことが難しい(次の授業までに忘れている)。

G. 教師の指導に対する知識



言語指導における科学的理論について、教員の自信の低さが表れているコメントが多い。理論を理解できていない、知っていても実践できないなど、課題のレベルは様々。

理論を理解しているか、実践できているか、自信がない	
中学校	高等学校
- 細かな指導法などについて知識も経験も非常に不足していると感じる。 - 専門的な知識に対してあまり自信はありません。 - 発信語彙と受容語彙の違いは理解していますが、授業の中でどのように指導していくかがあまり理解できていません。また個別最適な支援やライティングのフィードバックも色々な方法を試してはいるのですが、これといった最適解が見つかっていない状況です。 - 断片的な知識や自身の経験に基づいてしか指導できていない。 - 理解しているつもりでいただけで、実際は理解できていないのかもしれない。	- 今までの経験上指導しているが、しっかりとした裏付けが無いので、あやふやな指導になってしまっている。 - どれに関しても肌感覚の域を脱しておらず理論を理解しているわけではない。 - 知識としては学んできましたが、実践力が身につけていません。 - 自分の経験や他の先生との話の中で、繰り返しと復習のタイミングが大切であり、何より英語を学ぶ動機づけが根本にあると感覚的に理解しているつもりですが、科学的なことは分かっていません。 - 言語指導の理論的な裏付けについて、知識が十分ではないと思う。 - 本で読んで知識はあるが授業に活かしているかは自信がない。

ここでもフィードバックの難しさについて多くの声が挙がった。知識の不十分さと共に、時間の制約に言及するコメントが散見された。また、「記憶に残る新出語彙の導入」について、興味を持っていた。

適切なフィードバックが難しい、できていない	
中学校	高等学校
- 日々の授業をこなすことに精一杯で、適切なフィードバックを実施することができていない。 - 大学在籍時、言語習得やフィードバックについて学んだが、それを実践の中で生かしているかという点、十分ではないと感じている。 - それぞれの生徒にフィードバックをしたいと思いながらも、時間や人数の関係でなかなかできないのが現状です。効果的なやり方を学びたいです。	- 短時間でできるフィードバックやサポートについて知識が不足していると感じる。 - どの程度まで自分が分かっているのかよく分からないのでこのような回答とします。フィードバックについては常に課題と感じています。時間のなさを理由にフィードバックを怠ることもあるので、適格&効果的な指導方法を知りたいです。 - 自分なりに工夫してフィードバック等を行ってはいますが、それが果たして正しいのかどうかは正直に言って自信がありません。

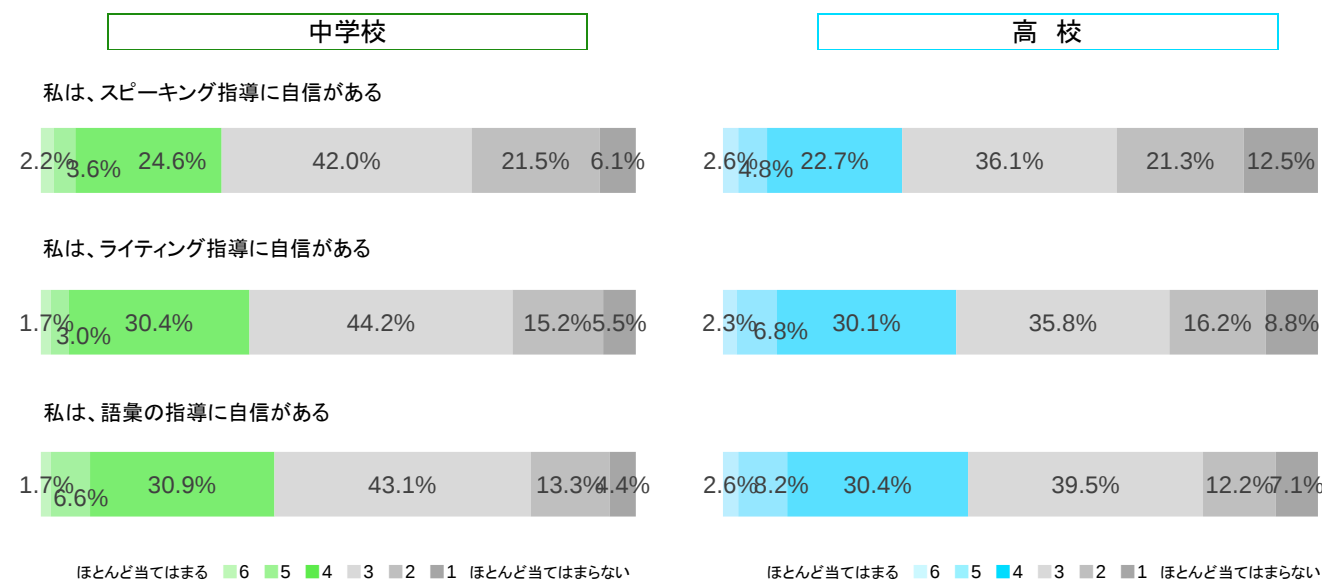
「記憶に残る新出語彙の導入」を詳しく知りたい	
中学校	高等学校
- 生徒の記憶に残る指導の方法についてあまり考えることがなかった。スパイラル的に指導していくことがその一つだと感じるが、そのほかの方法について学んで行きたい。 - 記憶に残る新出語彙の導入について詳しく知りたいです。	- 生徒の記憶に残る進出語彙の導入方法を知りたい。 - 支援の仕方についてや、記憶の仕組みの利用の仕方をぜひこの研修で学びたい。

指導方法について、知識を深めようとする意見がみられた。また、実際には様々な学力レベルの生徒を相手に授業を行わなければならない、そのための方法を模索している様子がうかがえた。

指導方法を学びたい	
中学校	高等学校
- 最新の科学的根拠に基づいた効果的な指導法について学びたいです。 - 上記の内容に関しては完全に勉強不足なのでしっかり研究しようと思います。 - 色々な指導法を知りたい。	- 上記に関して十分な理解はないので、研修で学べたらと思います。 - ヒントは必要に応じて与えるように心がけているが、理論上効果的な方法を学びたいと考える。

学力差のある大人数相手の指導方法を模索している	
中学校	高等学校
1クラスの人数が多いので、全員が課題を完了できるところまで見きれいていません - 低学力の生徒に対する支援についてもっと学びたいと思っています。	- クラスの中でも理解の程度にバラつきがあり上達に導くための支援がうまくできていません。 - ある程度の学習に関する科学的な知識があっても、多数を相手に効率よく実践することに限界を感じている。

H. 教師の指導に対する自信



総じて「自信がない」というコメントが多かった。特に、今行っている指導で正しいのか、理論上の裏付けを求める声がみられた(このような意識が、本研修の受講理由になっている)。

自信がない・正解がわからず不安	
中学校	高等学校
- 基本的に自分の指導に自信は持てていません。何が正解なのか、100%の正解はないとわかっていますが手探りの状況です。 - いずれの指導力にも自信が持てないため今回の研修に応募しました。 - 指導力にはあまり自信がないので、自信をつけるためにも研修を頑張りたい。 - 指導方法が合っているのか、不安になることがあります	- 指導に関して自信がないので、この研修でヒントを得たいと思っています。 - どういった指導をしていけばいいのか、指導方法が合っているのか正直わかりません。 - 体系的に学んだ事が無いので、自分の指導の仕方が理論的に正しいのか不安を感じます。 - 自信がないとまでは言いませんが、今やっていることが本当に正しいのか、他に効果的な指導法があるのではないかとこの研修を受講することになりました。

スピーキング指導の評価・フィードバックについて悩む教員が多かったが、中には、「自分自身もスピーキング力/英語を話すことに自信がない」と訴える教員も。

スピーキング指導の評価・フィードバックの方法に悩む	
中学校	高等学校
- スピーキングに関して、達成度や習熟度の確認の仕方が難しいと感じています。 - 全て課題に感じているが、特にスピーキングの指導は何をもって正解とするのかということや、	スピーキング指導はライティング指導と比べ、活動させた後のフィードバックや評価方法に難しさを感じる。語彙の指導については、楽しさを感じさせながら学ばせたいと思っているが、なかなか難しい。

production, accuracy, fluency のバランスのどれを重視するのかなど基準を持てておらず指導ができていないと感じる。	特にスピーキングの指導に関しては評価の観点も含めて難しい
--	--

ライティング指導については、中学校教員は「生徒の力を伸ばす」ことに、高校教員は「文法指導」に難しさを感じている。語彙指導については、マンネリになりやすい暗記以外の方法を模索していた。

ライティング力を伸ばす指導法や文法指導に悩む	
中学校	高等学校
- ライティング指導にかける時間が足りないと感じていますが、どうすればさらに伸びるのか、生徒達がより興味をもって活動できるのかについて指導面に不安があります。 - ライティングの設定や課題はうまく作れている部分もあるが、フィードバックとそこからの生徒の力の伸びのリンクが難しいように感じる。	- 細かな文法的指導において感覚的にその文が容認可能か否かはわかるが、なぜそうなのかを理論的に説明することができないことがある。 - 私自身、もともと英語が苦手だったこともあり、高度な英文法などを教える自信がない

生徒に語彙を定着させる工夫を模索している	
中学校	高等学校
- 語彙指導はマンネリ化しやすく、色々な方法を学びたいです。 - 語彙の指導については、日々たくさんの新しいものが出てくるので、生徒が興味を持ったり、意欲的に取り組めるような活動を行えていないと思います。 - 語彙については単語練習のような根気強く覚える以外にどんな方法があるか模索しています。	語彙指導についてはもっと研究したいと思います。

以下は、英語指導全般の悩みや、その他のコメント。

英語指導全般に悩む	
中学校	高等学校
- なかなか力を伸ばせていません。 - あらゆる方法を試してみてもはいるものの、生徒の興味関心を高めつつ、技術を高める方法を探すのが難しい。 - 効果的な指導法を知りたい。	- スピーキングやライティング、語彙の指導力をより向上させたいと感じている。 - スピーキング指導とライティング指導については自分の中で指導法を確立できていない。 - どのようにすれば、生徒の動機付けに繋がる指導になるか日々模索中である。 - スピーキング、ライティング、語彙の活動中、活動後での効果的なフィードバックの方法が自分自身まだまだ改善の必要があると感じています。

2) 教員研修の課題の整理

「教師が学び続けられる機会の保障」と「全国的な教師の英語力・指導力の向上を図る」ことの両立に向けては、オンライン研修での実効性を高める必要があります。世界の先行研究を踏まえ、留意すべき要点を確認します。

「効果が高い」教員研修の共通点

世界各地の教員研修に関する研究をまとめると、「効果が高い」教員研修には次のような共通点が見られます。

1. 生徒の学習成果を焦点に設計している
2. 指導スキルを実践的に習得する
3. 教師自身が変化を実感できる
4. 最新の科学研究を活用する

1. 生徒の学習成果を焦点に設計する

研修の目的は、生徒の学力向上に寄与することであるため、教室で起こっていることや生徒の現状を踏まえ、どのような力をつけたいのかという「生徒の成果」に焦点をあてます。

2. 指導スキルを実践的に習得する

生徒に期待する学習成果を導くために、教師が生徒の力を引き出す授業スキルを習得することが必須です。指導の見本を実際に目の前で見て、それを自分でも体験・練習することが、授業で実行できるようになるための第一歩。書かれたものを読むことや人の話を聞くことだけでできるようになるのは難しく、知識があれば行動できるというのは間違った思い込みです。

3. 教師が変化を実感できる

教師が一番にやりがいを感じるのは生徒の成長です。自分の指導改善と生徒の成長の関連が目に見えれば、授業改善に継続的に取り組むモチベーションになります。新しい指導スキルを習得することは、現在の指導習慣を少なからず変更することを意味します。誰でも習慣を変えることは難しいもの。せっかく研修で新しい手法を学んでも、研修後の授業実践につながらなければ変化は起こりません。

4. 最新の科学研究を活用する

世界にある教育関連の「エビデンス(科学的根拠)」の質の強弱に留意しながら、積極的に最新の研究を活用します。教育に関する営みは様々な分野に横断しており、いろいろな面から指導を考えていくことが重要です。例えば、認知科学(人間の記憶や思考などのしくみ)、学習心理学(人はどう学ぶのか)、行動分析学(行動はどう変わるのか)、インストラクショナルデザイン(効率的効果的な教授設計)などがあります。教師の学びを扱うのですから、教育心理学や教師教育学(教員養成・研修や育成担当者が研究対象)も重要な分野です。

研修が授業改善に結びつかない原因

■研修の目的「研修転移」

研修はあらゆる職業や職場で実施されています。その目的は、個人の可能性を高めることを通じて、組織の成果向上に貢献すること。そのため、研修のゴールは学びや成長ではなく、研修で学んだことが現場で実践される「研修転移」です。教育においてもそれは例外ではありません。教員研修における研修転移とは、授業における教師の「行動」、つまり授業そのものが変わり、生徒に良い成果を導くことです。しかし行動変容は複雑な要素が絡み合い、それほど簡単に進むわけではありません。

■研修転移に至らない理由

教員研修後に成果がもたらされない理由には、次のようなことが上げられます。

- ① 講義式で理論のインプットのみを重視する。
- ② 実践的な指導テクニックは紹介するが、いつ・なぜ、それを使うのかという理由は説明されない。
- ③ 新しい指導テクニックを扱うが、受講者に練習の時間が与えられない。
- ④ 研修内容があいまいで、教室での具体的な手順がわかりづらい。
- ⑤ 研修での情報量が多く、認知負荷がかかり過ぎる。
- ⑥ 研修内容が科学的根拠に基づいていない。
- ⑦ 講師や研修環境が受講者に対して支援的ではない。
- ⑧ 新しい「指導習慣」として定着するまでに必要な時間やフォローアップが提供されない。
- ⑨ 受講者が実際に実践したかまでは追跡していない、あるいは追跡する方法が組まれていない。
- ⑩ 管理職や同僚からの理解や支援が十分ではない。

以上のように多くの理由がありますが、これらは研修の設計をていねいに組むことで回避できます。

オンラインの種類と特徴

オンラインにも多くの利点があります。大人数の参加やコンテンツの繰り返しの活用が可能であり、移動時間の削減や研修会場が不要であるなど、様々な面で利便性が高いとされています。一概にオンラインと言っても様々な種類があります。

- ① 録画配信(オンデマンド)
- ② 同時・一方通行型:(リアルタイムのウェビナーやビデオ)
- ③ 同時・双方向型:リアルタイムで講師と受講者、あるいは受講者間のやり取りがある

①の録画配信は「いつでも視聴できる」ことが利点で、知識伝達型のコンテンツとしては活用しない選択肢はありません。また、最近は隙間時間で学べるように短い動画が多くあります。その反面、「いつでもできる」という自由さから後回しにしているつまでもやらなかったり、「ながら視聴」に陥りやすく、また視聴の有無も視聴態度も主催者側は把握できません。中には「いつでも参加可能」というオンライン研修の良さを認識しつつ、「プレッシャーや義務感がないので、あまり重要視していない」という否定的な感想を残す教師もいます。だからといって、②のように決まった時間に参加する形にすれば「参加」割合は高まるかもしれませんが、一方的に情報を受け取る形には変わりありません。

また(事後課題の提出義務があるかどうかに関わらず)オンライン研修への参加業務負担を増大させることもあります。教師にかかる負荷と達成できる成果とのバランスに注意することが必要です。この点から、実効性のあるオンライン研修にしなければなりません。そのためには、主催者側の研修設計がより重要になります。

③では双方向のやり取りが可能なツールを使えば、オンラインであっても対面に近い学習活動ができます。移動時間が削減できる一方、受講者には主体性や自律性がより求められ、ICT 操作や受講環境の確保も受講者の責任となります。講師にとっては対面以上に様々なスキルが求められます。

出典: 変化のための英語教員研修のデザイン 明日からの授業が変わるための 16 の視点(ブリティッシュ・カウンシル 2023)
<https://www.britishcouncil.jp/programmes/english-education/japan/handbook>

3) 事前事後意識調査のデータ

		中学校			高校			
質問群		n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差	
B	私は、授業中、生徒が英語でお互いに話す機会をたくさんとっている	事前	362	3.99	1.05	352	3.65	1.39
		事後	362	4.37	1.05	352	3.99	1.26
	私の授業の「話すこと[やり取り]」の活動では、私は、生徒がワークシート等を使わずに即興で話すようにしている	事前	362	3.51	1.30	352	3.18	1.52
		事後	362	4.00	1.27	352	3.50	1.41
C	私は、話す活動において、生徒が新しい情報を得るようにしている	事前	362	4.11	0.93	352	4.02	1.16
		事後	362	4.41	0.87	352	4.37	1.07
	書く活動をする時、生徒は誰に対して何のために書くのかを理解している	事前	362	4.13	1.10	352	3.95	1.27
		事後	362	4.47	1.01	352	4.30	1.11
D	私は、一部の生徒が聞いているだけにならないように、生徒同士話す活動をたくさん取り入れている	事前	362	4.44	0.95	352	4.39	1.29
		事後	362	4.63	0.93	352	4.62	1.21
	私は、生徒の生活と授業のテーマが関連するように工夫している	事前	362	4.30	0.96	352	4.26	1.10
		事後	362	4.60	0.97	352	4.65	1.03
E	私は、生徒が自分の考えや経験、気持ちを話すように工夫している	事前	362	4.23	0.92	352	4.26	1.01
		事後	362	4.61	0.91	352	4.63	0.93
	私は、全体的に、多くの生徒は英語の授業を楽しみにしていると思う	事前	362	3.82	0.86	352	3.65	1.00
		事後	362	3.99	0.81	352	3.88	0.90
F	私は、生徒は英語で互いに話をする活動を楽しんでいると思う	事前	362	4.26	0.90	352	4.11	1.14
		事後	362	4.45	0.84	352	4.36	1.03
	私は、生徒は英語を書く活動を楽しんでいると思う	事前	362	4.26	0.90	352	3.26	1.02
		事後	362	4.45	0.84	352	3.55	0.93
G	生徒は新しい語彙や表現を学ぶことを楽しんでいると思う	事前	362	3.76	0.88	352	3.73	1.07
		事後	362	3.94	0.76	352	3.96	1.01
	私は、生徒の話す力が上達しているのがわかる	事前	362	3.76	0.91	352	3.39	1.13
		事後	362	4.15	0.84	352	3.94	1.07
H	私は、生徒の書く力が上達しているのがわかる	事前	362	3.59	0.93	352	3.37	1.13
		事後	362	3.99	0.80	352	3.93	1.06
	新しい語彙や表現の指導直後に、私は、生徒の理解の程度を把握する	事前	362	3.95	1.14	352	3.91	1.16
		事後	362	4.18	0.97	352	4.28	1.04
I	新しい語彙や表現の指導によって、私は、生徒がその語いや表現を使って言ったり書けるようになってきているのがわかる	事前	362	3.70	0.92	352	3.44	1.06
		事後	362	3.97	0.81	352	3.88	0.99
	私は、書き言葉と話し言葉の違いについて十分な理解がある。	事前	362	3.50	1.00	352	3.58	1.08
		事後	362	3.98	0.90	352	4.13	1.06
J	私は、生徒に「話すこと[やり取り]」の活動に必要な支援(足場がけ)を提供する方法について十分な理解がある。	事前	362	3.30	0.98	352	3.29	1.10
		事後	362	3.98	0.81	352	4.09	0.99
	私は、生徒の話す力を向上するために、活動中の様子を観察し、上達に導くためのフィードバックを与えることについて十分な理解がある。	事前	362	3.36	0.92	352	3.26	1.05
		事後	362	4.08	0.80	352	3.98	0.95
K	私は、生徒の書く力を向上するために、活動の様子を観察し、全員が課題を完了できるための支援や、上達に導くためのフィードバックについて十分な理解がある。	事前	362	3.28	0.89	352	3.28	0.99
		事後	362	3.98	0.76	352	4.02	0.90
	私は、記憶のしくみ、及び、生徒の記憶に残る新出語彙の導入や支援のしかたについて十分な理解がある。	事前	362	3.14	1.03	352	3.17	1.05
		事後	362	4.04	0.88	352	4.24	0.93
L	私は、スピーキング指導に自信がある。	事前	362	3.05	1.02	352	2.94	1.17
		事後	362	3.58	0.99	352	3.41	1.15
	私は、ライティング指導に自信がある。	事前	362	3.15	0.96	352	3.17	1.13
		事後	362	3.48	0.92	352	3.63	1.06
M	私は、語彙の指導に自信がある。	事前	362	3.27	0.98	352	3.28	1.09
		事後	362	3.63	0.95	352	3.83	1.00